

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

17  
290

圖解  
盛花と水揚  
全

始





11-290



德

生

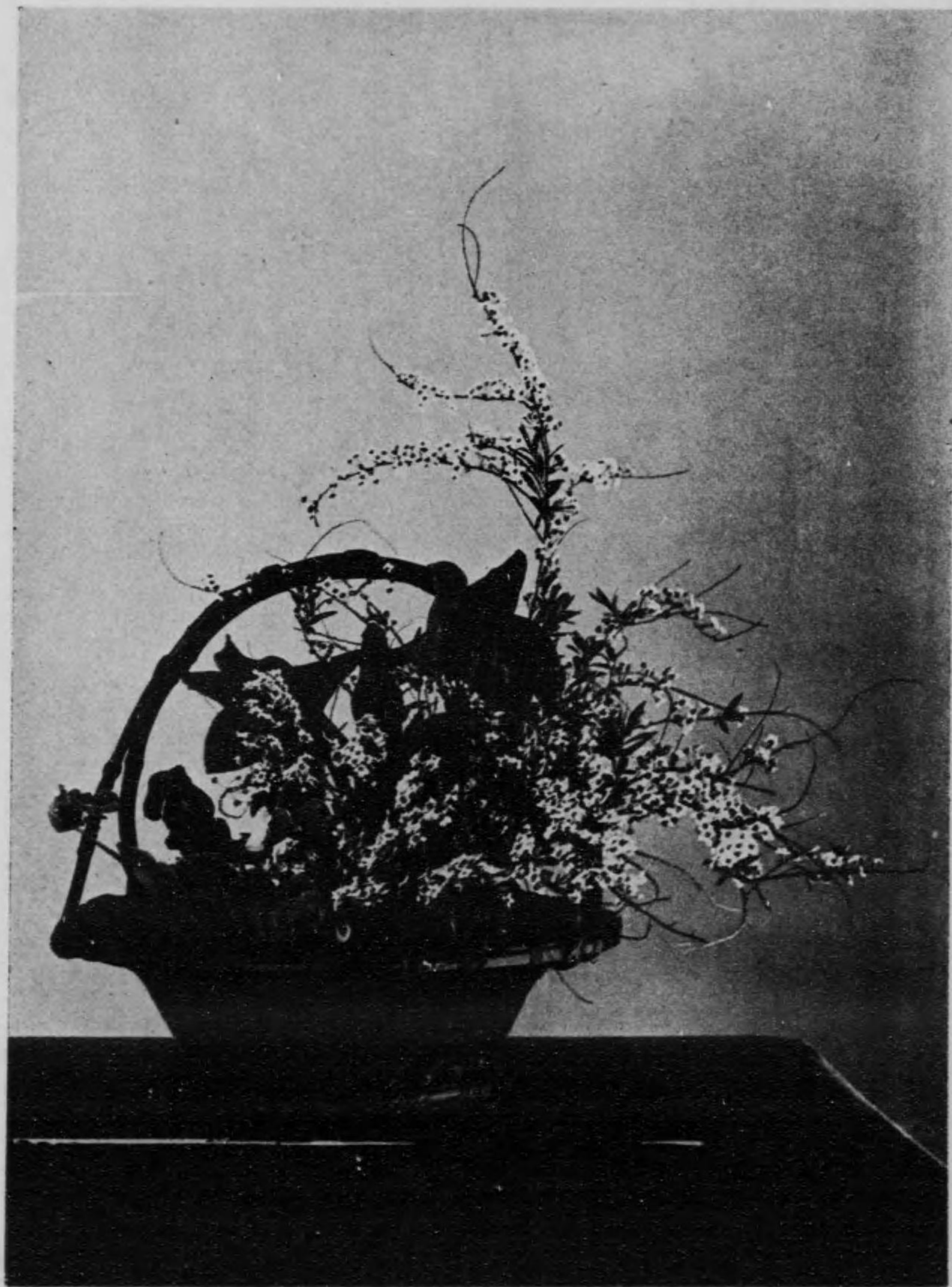
德

真田如也



大正  
6. 9. 28  
内交





行印 翠鳴玉



花盛の籃花釣形船



此籃ハ陸軍特別大演習御統監ノ爲天皇陛下大府下  
行幸被遊シ際田邊竹雲齊氏ヨリ献上セシモノナリ



花盛の(恭里柳)籃花



遊被啓行へ方地識近ガ下殿宮東月五年六正大ハ籃花  
リナノモシセ上獻リヨ氏齊雲竹邊田際シ

序

自然の幽致を方寸の裡に托し山紫水明の大觀を几窓の間に寄せて以て吾人に無限の興趣を附與する者實に盛花を以て最となす、宜矣其流行今や漸く一世に普ねからんとすることや。

而して盛花の流行に伴ひ之に關する著書の世に公にせらるゝ者亦一二にして止まらずと雖も、而も從來の著書や説いて詳らかならざるのみならず、盛花の最要義たる材料の撰擇及配合を閑却せる者多きが爲め世人をして隔靴搔痒の嘆あるを免れざらしむ、是れ余が斯道の爲め竊かに遺憾とせし所なりき。



序  
橋本墨花君如上の缺陷を補はんと欲し苦心慘愴、自家多年の経験を詳述して一書を著はし題して「盛花と水揚」と云ふ、取りて之を見るに器具材料の種類撰擇及配合より挿入及水揚法に至るまで、盛花に關する一切の事項を網羅して餘蘊なく、説く所亦平易丁寧にして初心者と雖も一讀以て盛花の要領を知悉することを得しむ、著者用意の親且切なる誠に歎賞に價する者あり。  
本書や從來の缺陷を補ひ斯道獎勵の一助たるを得ば著者の勞やまた徒爾ならざる可き歟。

大正六年春季皇靈祭の日

## 伯爵 鷺尾隆 信 識

## 自 序

余は素より風流を解せず未だ以て挿花を論ずるの資格はないが年少の頃から花を愛し嗜好は更に挿花に及び香り床しき野山の千草を手折り來り瓶裡に挿しては無上の樂しみとして居つた爲めに多年の經驗上から挿花の實際に就ては自得せしこと尠なからずと信じて居る。  
近時各階級の社會に所謂盛花が非常に流行し従つて之れに關する著書も二三上梓せられたが其説く所理論に偏し實際に疎く初心者をして盛花の一般を了解せしむる爲めには尙足らざる所多きは日頃遺憾とする所であつた。  
たま／＼昨夏書肆文進堂主人の切なる囑を受け薄識淺學



を顧みず年來の経験と先輩の助言とを得て専ら初心者の  
参考に供せんが爲め本書をものして見た、若し夫れ之れ  
が幾分たりとも斯道發達の一助とならば誠に望外の光榮  
とする所である。

本書を公にするに臨み帝室博物館總長股野琢氏の題字及  
伯爵鷺尾隆信氏の序文を辱ふし又田邊竹雲齋氏は秘藏の  
寫眞を貸與せらるとともに茲に謹んで謝意を表す。

丁巳年神武天皇祭の日

住吉高塔下の閑居に於て

### 墨花生識

## 盛花と水揚目次

一	緒言	一
二	挿花の起原と變遷	二
三	盛花の眞價	四
四	盛花用器具	五
五	盛花の姿	八
六	材料の撰擇	三
七	盛花の挿入法	四
八	自然本位と色彩本位	二
	□色彩の配合	
九	果物の盛花	二六



一〇、蔬菜の盛花……………三〇

一一、挿入上の心得……………三一

一、和室……………床……………軸との調和……………壁の色

二、洋室……………テーブル上の盛花……………机上の盛花

三、季節による變化……………春の盛花……………夏の盛花……………秋の盛花……………冬の盛花

四、禁枝……………

五、祝儀に忌む花……………

六、儀式の花……………

七、毒ある草木……………

一二、盛花圖解……………四七

一三、材料の種類……………七四

一、葉を賞するもの……………木性のもの……………草性のもの

二、花を賞するもの……………木性のもの……………草性のもの……………洋種球根類……………洋

種類科類……………雜草類

三、果實を賞するもの……………木性のもの……………草性のもの

一四、材料の配合……………八四

春の配合……………夏の配合……………秋の配合……………冬の配合

一五、水揚法……………一〇〇

一六、水揚の仕方……………一〇一

物理的方法と化學的方法

一七、切花の水揚……………一〇八

一、春の草木……………一〇九

○牡丹……………芍……………藤……………木蘭……………辛夷

○石楠花……………金雀花……………棣棠花……………麻葉繡毬

○珍珠花……………薔薇……………楓……………連翹

○アブチロン……………アカバレンサス……………ナスタチユーム……………カンチダフト



- ストツク
- カルセオラリヤ
- シネラリヤ
- 荷苞牡丹
- アクイリギヤ
- 菜の花
- 薊
- 罌粟・虞美人草
- ベチユニヤ
- ルビヌス
- ギフソフヒラ
- エスンヨルヂヤ
- アンテイリナム
- 虎の尾
- アネモネ
- レナンキユラス
- フリージヤ
- シクラメン
- スキートビー

二、夏の草木

- 紫陽花
- 百日紅
- 木槿
- 夏藤
- 竹
- 夏菊
- フクシヤ
- はまぎく
- 桔
- カンナ
- ダリヤ
- ぎぼうし
- ペコニヤ
- はなたで
- フロツクス
- サルピヤ
- デルヒニユーム
- 黄蜀葵・紅蜀葵
- 縷紅草
- 牽牛花・鼓子花
- 猩々草
- アジアンタム
- グラジオルス
- モンブレチヤ
- イリス
- イキシヤ
- アマリリス
- カラジユーム

三、秋の草木

- グロキシニヤ
- クレロデンドロン
- コレオブシス
- シレネ
- シヤスタデジ
- ヘリアントース
- デキタリス
- カンパニユラ
- ゴデチヤ
- パーベナ
- 芦
- 蘭
- 猿猴草
- 逆
- 萍蓬
- 蘭
- 海芋
- 萍蓬
- 濁澤

- 芙蓉
- 秋萩
- 秋菊
- ブーゲンベリヤ
- 冬さんご
- ヘリオトロップ
- イレシ子
- アゲラタム
- すゝき
- 蘭草
- かるかや
- 紫苑
- われもこう
- 雁来紅
- 秋海棠
- 秋明菊
- ガイラルデヤ
- トレンニヤ
- コリウス
- コスモス
- ジンニヤ
- ビンカ
- アスタ
- シベルス
- 惹
- 苳





説圖 盛花と水揚

橋本墨花著

緒言

世に花ほど優美で清浄なものはあるまい。花に對する時は當面の悲哀も憤怒も疲勞も全く打消されて何となく心が清々として娛しく之を培養すれば無限の趣味を生じ之を愛翫すれば絶大の慰安が得らるゝものである。故に花を挿すの術を學べば自然に精神を高尙ならしめて彼の害あつて益なき單純な娛樂と同一視すべきものではない。況して寸尺の空地をも餘さざる瓦屋櫛比の都市に生活するものに至つては眼に綠樹の雅趣を観る能はず手に花卉の風致を弄ぶ能はざるの有様である。斯くの如き不幸なる都人士に向つて一盆に盛つたる清楚なる花は郊外に於ける四季

緒言

一

目次(終)

○楮	○落	○甘	○疑	霜	紅	藍	冬	(以)	上	○山	○桃	○萬	○水	○金	○蓬	○臘	○梅	○瑞	○寒	○藜	○香	○菊	○吾
										葉	葉	年	年	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
四、冬	の	草	木	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………

目次

六

二六



の風情を偲ばせて云ひしれぬ床しき心地がするものである。社會は刻一刻と吾々人類に精神的の過勞を要求してゐる。これを慰するに花を増したるものを他に求めることが出来ないものである。近時大阪の農學校でも其必要を感じて新に切花科と云ふ科目を設けて生徒の手作りの花で盛花の稽古をさせてゐるとの事である。これ當面の急務ではあるまいか。

## 二、挿花の起原と變遷

挿花は和漢とも往古よりありしものなれど何時の世如何なる時代に於て始まりしものか色々と言をなせど。要するに漢たるもので確かな記録を以て説明することは到底出来ない。

蓋し花を截つて水中に投ずれば枯れずして生を保つと云ふ事は往時に於て期せずして自然に知られたものであつて勿論現今の如く法式の定まりたることなく自然に生せる野草を手折りに只無意識に瓶に投じて眺めたものであつたのが、光が認めらるる様になり無雑法に瓶に投せられた花も枝振りを鑑別せられて頓て之が挿花の法式を胚胎するに至つたのである。

風情面白き野山の草木の自然の姿を席上に移して眺し進んで廣く室内の裝飾や賓客の饗應に其他一般階級の禮式の一として子女の教育にも資せらるゝ様になつたのである。

夫が爲め其道を究めたる澤山の名匠が出来て各自の考案によつて單調より技巧を加へ種々の花型が創始されて現今の様に多數の流派が生じ文人墨客の間には投入を嗜むもの多く熱心に唱導せられ籃には盛花風の投入が活けられ、又一盆中に山野池澤の想を現はしたる錦生や皿生等が生れ更に近來に及んで盛花専用の鉢が新作せられて和洋の草木を盛り新に盛花と稱へて關西を中心として盛に流行を來したのである。

蓋し盛花は決して近時に於て始まつたものでも發明せられたものでもない、



口繪に掲げた釣花籃柳里恭は二百年も以前のものを模したるものであつて當時既にこの籃に現今の盛花の様な花が活けられて居つたもので近時に至つて新しい名稱を附して傳播せられたのである。

挿花の起原や變遷に就ては諸説紛々として甚だ複雑で微細に研究すれば優に一巻をなす程である之に關しては古來より數多の書物がある事故茲には極く簡単に述べて置く。

### 三、盛花の眞價

日本の挿花と西洋の盛花と孰れが卓越して居るか云ふ事は人の嗜好や應用の場所に因て品隋の限りでないが西洋の盛花は只美しく盛ると云ふ事が主眼であつて別に一定の法式もなく種々の色彩の花を配合よく盛り上げて觀賞するに止まり徒らに艶麗に失し雅味に乏しく一般本邦人の嗜好に適せず洋風の室内にのみ限られて日本の室内には調和を欠く恨がある。

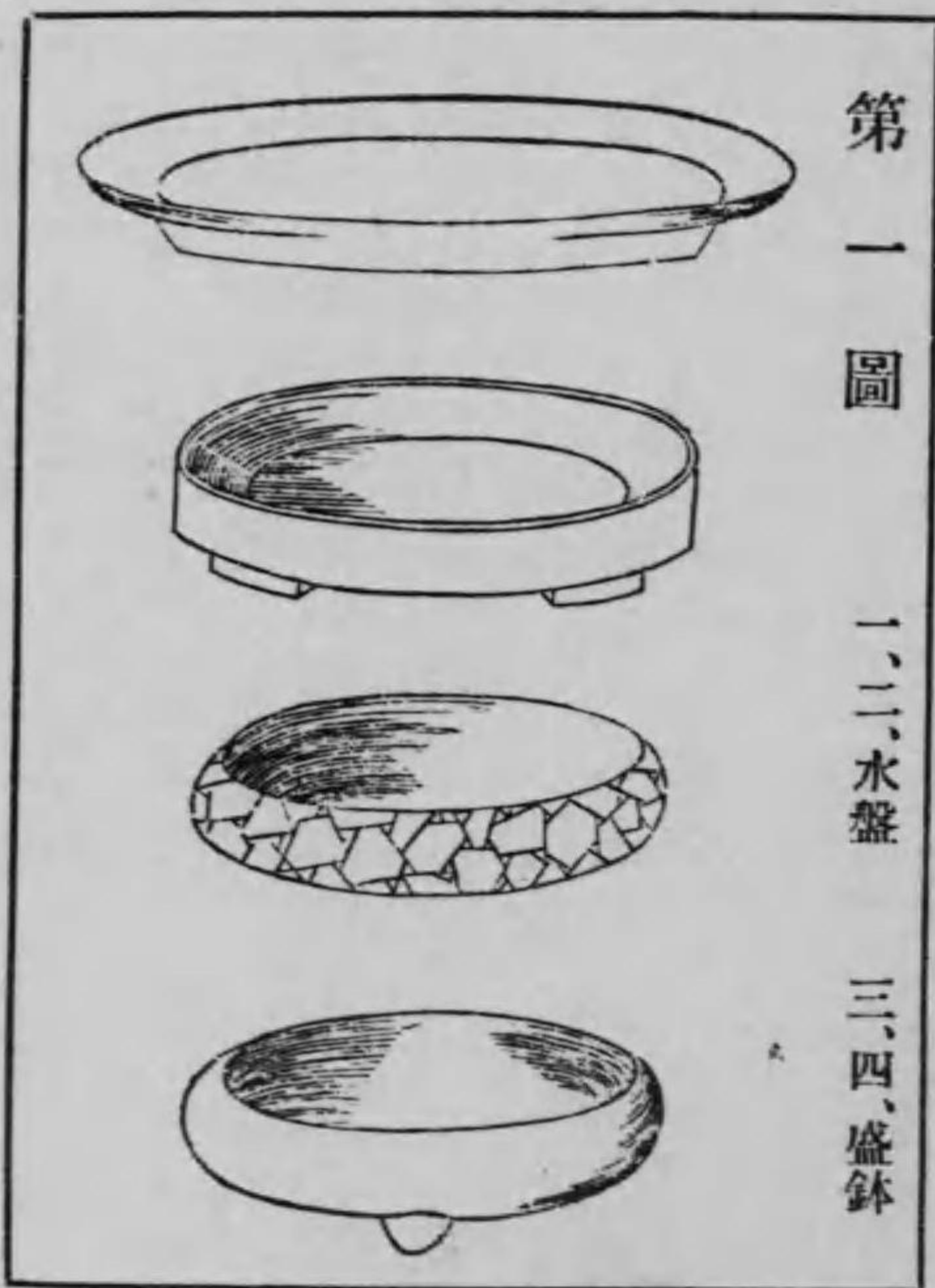
之に反し日本の挿花には一定の主張があつて天地人の三才を具へ自然の美を

發揮させることを主眼として居る此點は西洋の盛花よりは術に於て進歩して居るものと云はねばならぬ。

然れども用ふる花が主として日本の草木で美しい西洋の花を自由に活込む事が困難で且つ洋風の室内には絶対に調和がとれぬ嫌がある。

### 第一圖

一、二、水盤 三、四、盛鉢



盛花の眞價——盛花用器具

此の双方の欠點を補ひ合して産れたのが所謂日本風の盛花であつて草木の洋種なると邦種たるを問はず自由に盛り上げて和洋の室内に飾つてよく調和し其應用の範圍は遙に廣いのである。

### 四、盛花用器具

盛花に要する器具としては



普通に盛花器、花臺、花留、花鉢、鋸、霧吹器を用意すれば充分である。

盛鉢は普通圓形のものを用ふれど又楕圓形、長方形等の水盤も廣く使用せらるる大さは盛鉢は直徑八寸位より一尺五寸迄、水盤は一尺より二尺五寸位迄のものを用ふ鉢の色には白、茶、銅色、薄紫、淡黄色、水色等あれども花との調和上白色のものを用ふる可とす。

盛鉢には圓形、楕圓形、舟形、六角形等種々あり孰れも手の着たるものにして籃の中には水を盛る

第二圖



盛花籃

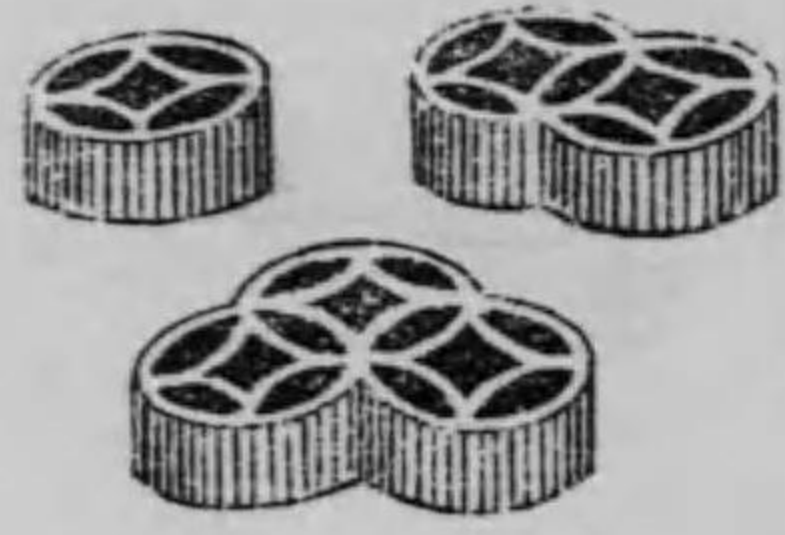
べき銅板又は亞鉛板製の『落し』を入れるものとす籃は通例晩春より秋に亘りて使用するものなれど盛花には花に應じて四季用ひて差支へがない其他銅器、瓢、及び木製の箱を用ふることもある。

花臺、花臺も色々あれど盛花用としては巻板、机、敷板等が適當で普通に巾一尺長さ一尺二寸位の漆黒板を用ひらる。

花留、花留には龜甲形、觀世水形、筏形、七寶形、金網、じや籠等の金屬製のものや陶器製のもの種々あれど通例アンチモニー製の七寶、三個付、二個付、及び一個のものを用ふ。

花鉢、鉢は花莖や枝を剪るに足ればよいので普通に岩駄師の使用するものにて充分であるが、田邊竹雲齋氏の考案になるものは第四圖に示す如く切口を潰壓する部分があるので活ける際に切口を碎く事が出来て最も便である、又新らしきを好む人は、ニッケル製の洋風剪定鉢を用ひてもよい。

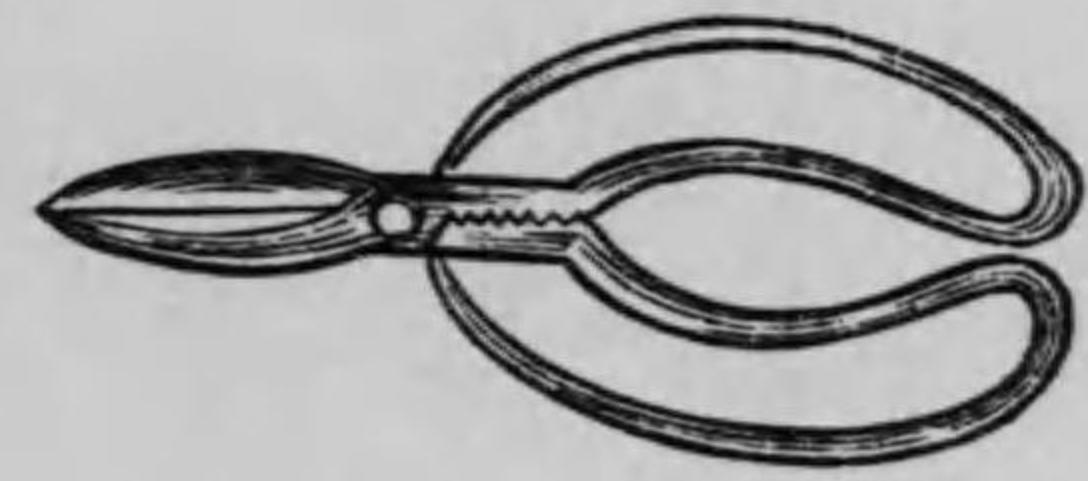
第三圖



七寶形花留



第四圖



新案花鋏

□鋸、鋸は鉄に餘る枝を剪るに用ふるのであつて長さ五寸位の小形で尖端の鬚挿櫛の様になつて居るのが便利でよい、又折込になつた簡便なものもある。

□霧吹器、霧吹器は眞鍮、銅等で造られた水鐵砲であつて盛花が出来上つた時、花に潤ひを保たしむる爲め水を細かく霧の様に噴き注ぐに用ふ、これは水揚器をかねた極く便利なのがある。

### 五、盛花の姿

日本の插花には各流儀に因つて種々六ヶ敷法則があれども盛花には斯くの如き一定不變の方式も作法もなく極く簡單なもので前にも述べた様にたゞ自然の枝振りのものを色彩の配合よく自然を失はない様に盛り上げればよいのである。勿論挿入するには大體天地人と云へる格を備へなければ姿の見え悪しきものなれば天地人を不等邊三角形に當て嵌めて恰好を作るのである。

即ち日本の插花には一瓶の中心に立登る高き枝を天とし低き水際の枝を地とし其の中間にあるを人と名け之を天地人の三才と云ふ。此の三枝を以て插花の本體を調へ其餘の五枝、七枝、九枝と用ふれども之は此の三枝を補ふ添枝となるのである。

盛花も大體之と同じ様なもので通例左の如き名稱を用ひた格で不等邊三角形を爲す様に盛り上げるのである。

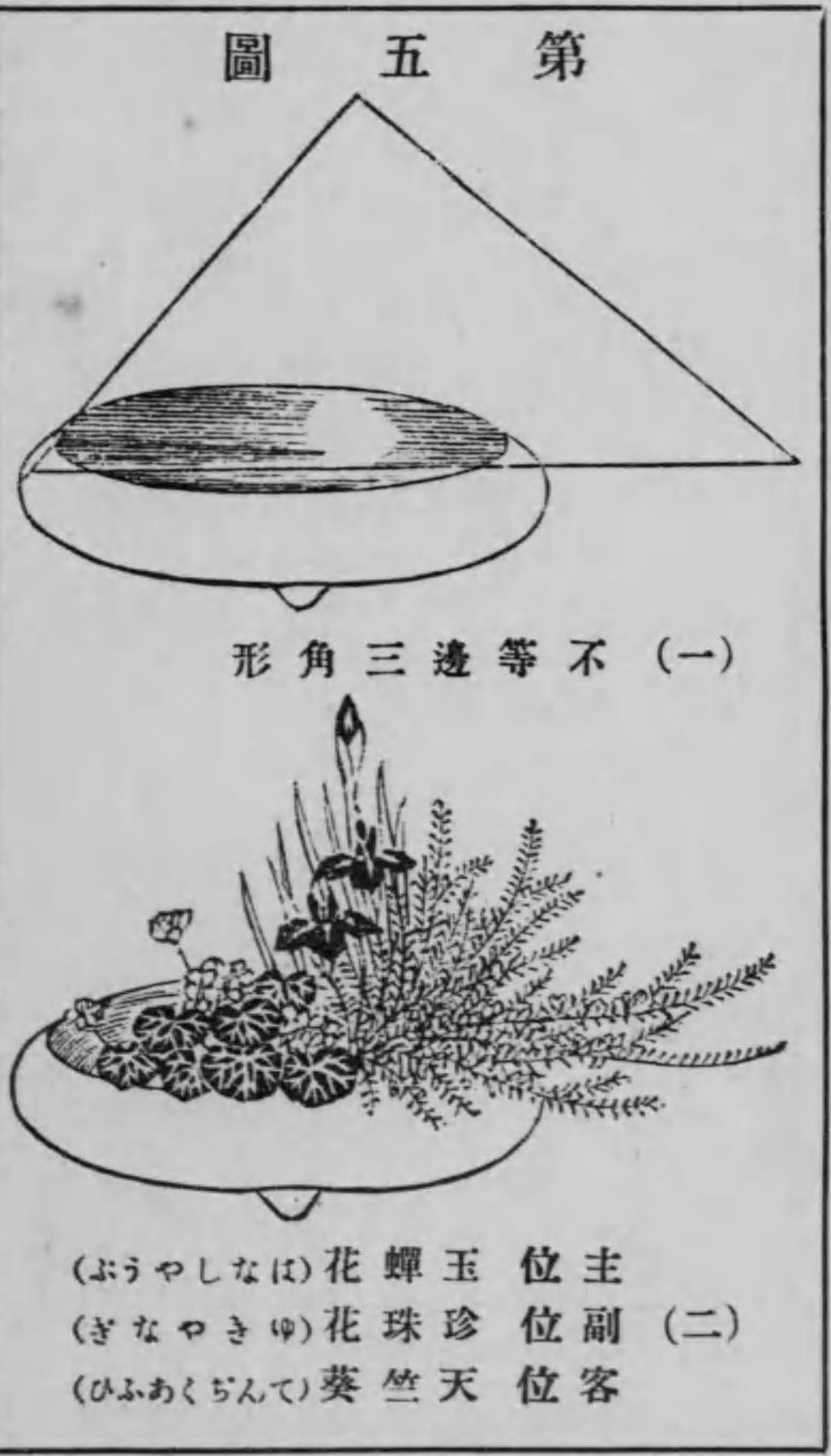
主位(又は眞) 副位(又は體、副、流) 客位(又は受)

之等の名稱も確定せるものにあらずして各自、色々と唱ふるものあれば判り易い天、地、人、の名稱を用ひても何等差支はないのである、本書では便宜上主位、副位、客位の名稱によつて説明を爲す事とせむ。

先づ圖に示す如く最初に主位を高く挿し夫より低く副位を入れ之と反對の角の處へ客位を挿すのである、之れが盛花の基本となるべき型であつて其各々連絡を「落込」又は「谷」と云つて其部分へ補ひの枝を挿入しては、不等邊三角形をなす様に恰好を作るのである。



之は大體の標準であつて日本の插花の如く何を何回活けても一定の型に當て



て置いて實際に盛る場合に當つては花の種類や其枝振りによつて姿をくづして  
 もよいのである、強ち、きまつた型に當て嵌めねばならぬと云ふ事はない。

形にのみ拘泥して型を作る爲にむやみに枝を切り込んだりする時は自然の美  
 を殺ぎ甚だ没趣味である故に盛らんとする材料に因つて臨機應變の處置をとる  
 事が肝要である。

型も一本の枝にて主位と副位をかねたり主位と客位をかねたり副位と客位と  
 をかぬる場合や、又は葉が副位で花が客位となる場合等あつて決して別々の枝  
 で各々の格を作るに限つていない、又一本の草花を盛るにしても其枝振りや種  
 類によつて主位や副位が大體の標準より高くなつたり低くなつたりする場合が  
 あつて一般に草木の自然の生育状態に注意して挿して行けば自から其形が出  
 来るものである、花型は初心者の手本と同一の意味のもので最初の裡は型の模  
 倣であるが少し研究を積めば自然に経験も出来て技術も熟達し趣味も高まり自  
 然から花型に囚はれず規矩をはなれて意匠や趣向が出来る様になるものである。  
 要するに盛花は草木の自然の美を充分に現はして草木の自然に備へた其特有  
 の形態を害はない範圍に於て技巧を加へ即ち自然の美を人為に依つて遺憾なく  
 發揮させると云ふ事に歸着するのである。



然るに近時盛花として活けられてあるものを見るに盛花の意義を曲解し精神を没却してむやみに多数の花を挿し込んで濃麗に盛つたものが多い、之は盛花ではない挿花と稱すべきものである、斯くの如きは風致もなく精神もなく俗氣満々で商店の陳列場の裝飾にすぎない、之は無智の罪が盛花を毒したもので斯道の爲に長大息を禁じ得ないのである。

### 六、材料の撰擇

花を盛るに當つては其着手前に材料の撰擇が肝要で花を盛る器や飾る場所との調和の點をよく考へねばならぬ、一般に洋室には洋種の草木を盛り和室には在來の草木を、和洋折衷の室内には和洋種の草木を盛る方が室内に相應しく感ぜられ器も在來の草木や野草等は籃に盛り美しい西洋草花は水盤や盛鉢に盛る方が調和がよい、而して一般に水草は籃に盛る時は自然に反して見苦しき故是非共水盤か盛鉢に盛らねばならぬ。然れども之等對照の善惡は各人が多少の經驗と相俟つて始めて了解せらるゝ

ものである。

器具の用意が出来たならば今度は切花で後庭の手作りのものを剪るか又は花戸で購ふ場合には枝振りを選ぶ事が最も必要である。自然に枝振りの悪いものは盛り上げて何となく恰好が悪く見榮せぬものであつて、いくら上手に盛る人でも枝振りが悪ければ思ふ様に盛れぬものである。

又花や莖葉でも同一のものばかりにて盛り上げては風情がなく挿入も困難である。故に同じ花でも蕾のものや半開のものや満開のものや時によつては落花したものや結實したものをを用ふる場合があり葉も巻葉や新葉や古い葉や大きいものや小さいものや虫喰葉等を要し枝も又眞直なものや斜のものや懸垂したものが入用である故、盛る際には盛り上げる恰好を頭に浮べて夫れに適應すべき材料を選ばねばならぬ。

植物に因つては葉の割合に花梗を抽出することが少ないものがある例へばカシナノ様なものを盛には葉を澤山に用意して置いて花よりは葉を多く用ひねばならんが花戸では葉のよきものを澤山に求めることは不可能である。この様な



ものは庭の片隅へでも植付けて置けば新らしき宜きものを盛る事が出来て誠に結構である。

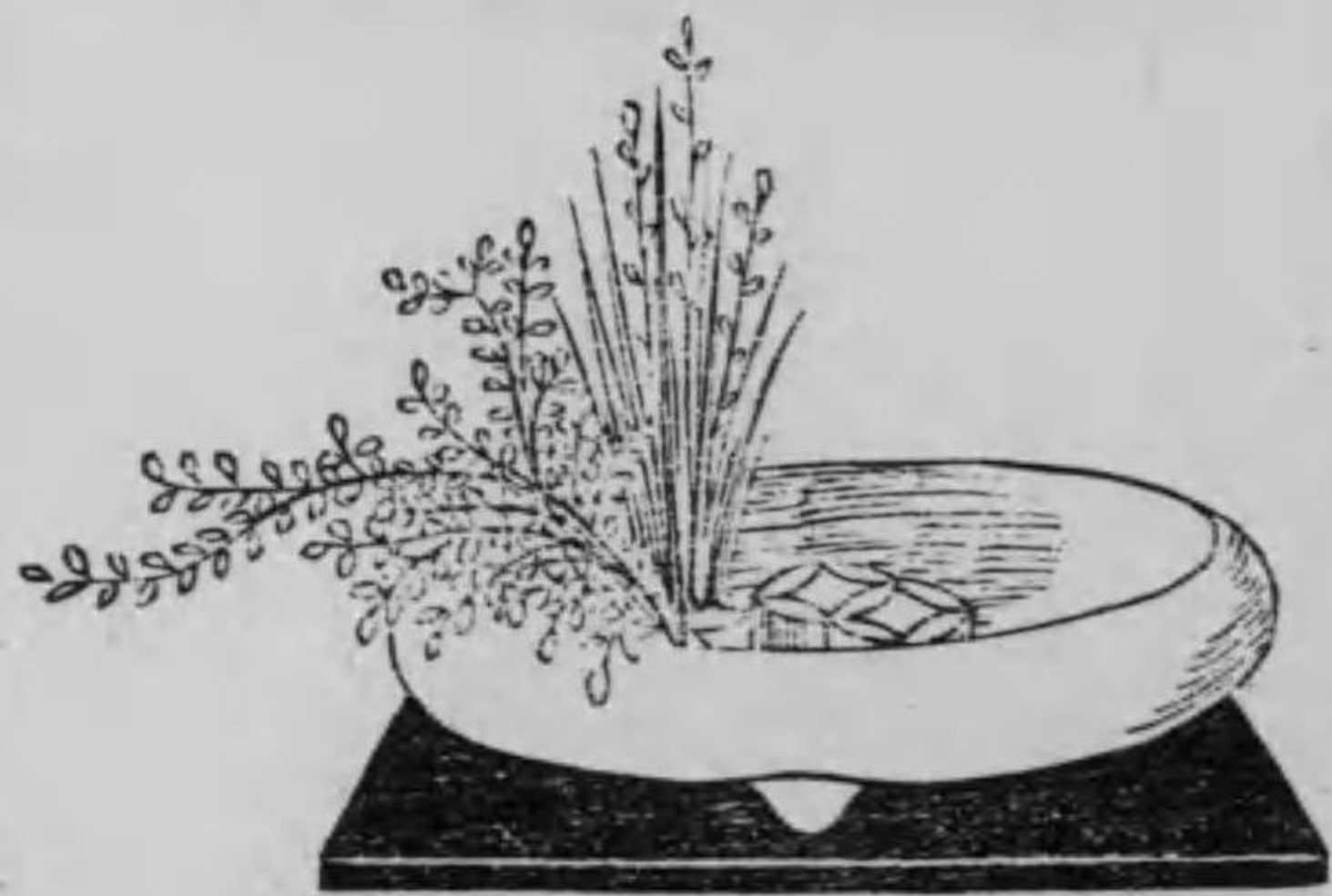
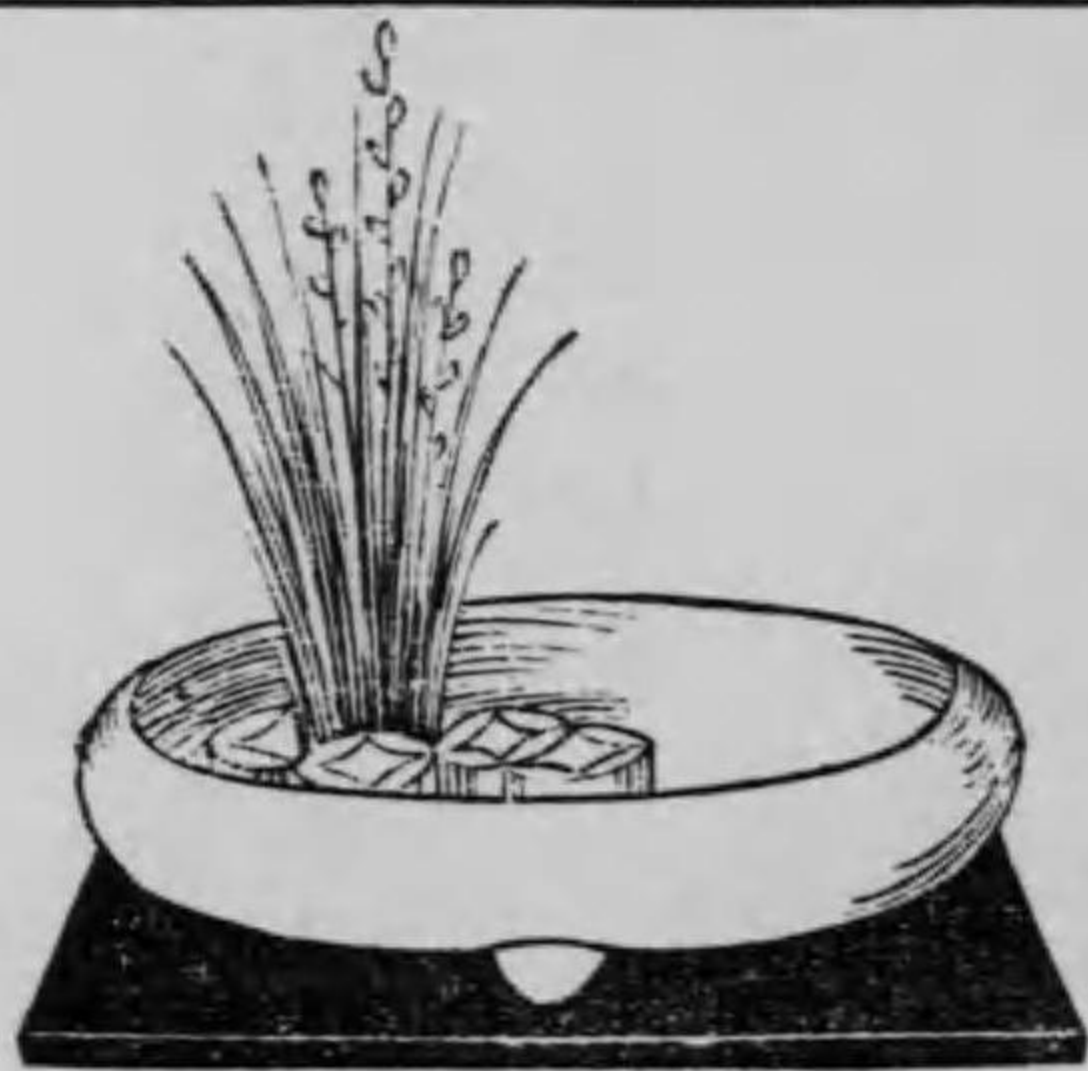
其他樹木類を用ふる場合には、なるべく老齡の枝の密なるものを選ぶべきである。

### 七、盛花挿入法

材料の撰擇が出来たならば今度はいよく活け込むのであつて挿入の方法としては別に六ヶ敷法もなく甚だ容易なものである先づ花器（水盤や盛鉢の三ツ脚のものは一本の脚を前面に出して之を花器の中央と定む）に半ば水を注いで机か又は臺の上に置き花器に對つて第一に器の半ばより後角に主位を入れるこれは盛花の姿の中心となるべきものなれば最初に挿入する方が便利である。この主位の枝の長さは活ける植物によつて差異あれども大抵花器の直径の一倍半即ち徑一尺の花器なれば一尺五寸以内の長さに入れるのが適當である。主位を入れて姿の中心が出来たならばこれに基いて副位を入れ其次に客位を

挿入するのが順序である補として入れる枝は後部を先に入れ前方を後に入れて

第六圖 盛花順序  
(一) 主位 (二) 副位 (三) 客位





枝の配列に注意し自然に生せる様に適當に長短をつくつて『落込』即ち『谷』をなす様に恰好よく盛るべきで枝が重なり合つたり段々に列をなすが如きはよくない。

同じ器に盛るにしても上手、下手によつて花の數量に非常に増減のあるもので其巧拙によつて七本要る處も五本ですみ其上、下手の七本よりも賑かく見ゆるものである、多數の花を無雜作に挿し込んだのはせゝこましくて如何にも挿した様に生氣がなく盛花は死んでしまふ、可成少量の花を用ひて立派に見ゆる様に盛らねばならぬ。

花を挿すには色の配合と排置に注意する事が必要である花には牡丹や木蘭や薔薇の様な離瓣花や百合や朝顔の様な合瓣花もあり、又、サルピヤやグラジオルスや虎の尾の様な穂状花やチキタリスやルピヌスの様な總状花や、虫とり撫子やフロックスの様な聚繖花や、ペコニヤやヘメロカリスの様な繖房花や、ブルムラや天竺葵の様な繖形花や日向葵や矢車菊の様な頭上花や小さく群り咲く珍珠花やギフソフイラ等もある、同じ離瓣花のダリヤや菊にても單瓣もあれば

重瓣もあり、よれ咲や管咲の様なものもある故、盛り上ぐるに方つては夫等の配列の位置をよく考へねばならぬ。

勿論其詳細に至つては實際に當つて説明もし研究もせねば會得することが困難であるが一般に主位には穂状花や總状花、又はギフソフイラや珍珠花の様な細かい花のものやアスパラガスや檉柳の様な細かい葉のものや、ネフヒロレピスやアジアンタムの様な羊齒科の植物を用ひ副位には主位に用ふるものか或ひは、これより稍大なる花や葉を用ひ客位には専ら大輪のものをを用ふるのが常である。

大輪の立派な花を主位として高く盛る時は其下に盛るべき副位や客位の花は夫が爲め全く見劣のするものである故、牡丹や百合や芍薬や、アマリ、スの様な大きい花は可成低く盛り若し主位か副位として用ふる場合には蕾のものを選ぶべきである。

花はすべて高低をなす様に挿し同じ高さに並んだり處々に集まつたりするのはよくない、同一の花は經路的に配列せしめて可成前後左右に分配せざる様



に盛るのであつて、水陸のものを一盆に盛る場合には陸のものを後方に挿し前方に水面を現はして水生のものを盛るのである。

盛花は色彩の配合よく盛ればよいと云つて花ばかり盛れば只目を眩する様に美しいばかりで全く無趣味なものが出る、この紅、白、紫、紅の妍に對し蒼翠滴らんとする葉を配して始めて調和がとれ目を新にすることが出来るのである、故に花を盛るには必ず葉と云ふ事を念頭から度外してはならない。

一般に調和の點からいへば其性質の強きものは弱きものと濃きものは薄きものと大なる花は小なる花と大なる葉は小なる葉と所謂陰陽の配合を附ける事が必要である。即ち大なる花のものには小なる花か又は葉の細かいものを配し葉の大なるものには花の小なるものか葉の小なるものを配して盛るのである。之に反して三種盛る場合に三種とも大きい花や葉のものばかり盛つたり或ひは細かい花や葉のみ盛る時は全く調和を缺いて面白くない。

而して盛るべき花や葉の數量は一般に偶數を忌み奇數を用ふ即ち一本とか三本とか五本とか七本とかである然れども二本丈は用ひて差支へがない二と云ふ

數は萬物の父母にして陰陽の二氣交はりて萬物生ずるが如く貴ばれ偶數に拘はらず用ひらる又花の種類も一種か二種か三種か五種か七種かであつて冬の盛花としては五種、七種等賑かく盛れど夏は大抵二種か三種位である。

花には其性質上曲つたり俯向いたりするものや又は枝振りの悪いものがある例へば妖冶塗るが如き艶麗なダリヤも惜しい哉花の大なる割に花柄が細く且、冗長なる爲め常に下向する癖があるので、あまり盛花として喜ばれない傾があるこの様なものを盛るには花頸を莖葉の股にかけて上向きしたり他の枝と捻じ合したり色々苦心して恰好よく盛るのであるが斯くしてもまだ剛情を張つて容易に随はない場合には最後の手段を用ふるのである。

勿論この方法は自然の美を愛し詩趣を掬む自然的の盛花としては相應しくない卑怯なやり方ではあるが材料が不足で曲つた枝や花頸の曲つた花を用ひねばならない場合や、うまく恰好がとれない時や、又花がよく水を揚げるもので斜を保つべき枝が上向して形を崩す場合等に應用して最も都合がよいので一通り心得て置くべき必要があることと思ふのである。



これは可憐な草木を惨酷に取扱ふ様ではあるが一方より見れば折角美しく咲き出でたる花も枝振り面白からぬが故に、あたから見捨てらるゝを只、一本の針金の爲に人間の賞讃を博し得ると思へば花もさぞ本懐な事であらう！

第七圖



たかしさの金針

ふ事柄である、又牡丹や木蘭や薔薇の様な花冠の落ち易い花を稍長く保たすには極く細き針金にて花の底より萼を貫いて十文字に通し突出せる四本の針金を花梗に繞はせるのである、又別法として針金を用ひないで蜘蛛の糸か蓮の莖の

之は喜歌師が盆栽の形を作る場合に屢々行附ければ其部分は自由に曲げることが出来る椿の様な硬い枝のものならば少し太き針金にて曲げ様とする枝の局部へ螺旋状に巻き附ければ其部分は自由に曲げることが出来る

糸にて花瓣をくゞり半開を保たす事も出来る。

八、自然本位と色彩本位

盛花は其盛り方に因つて自然本位と色彩本位とに別けることが出来る。

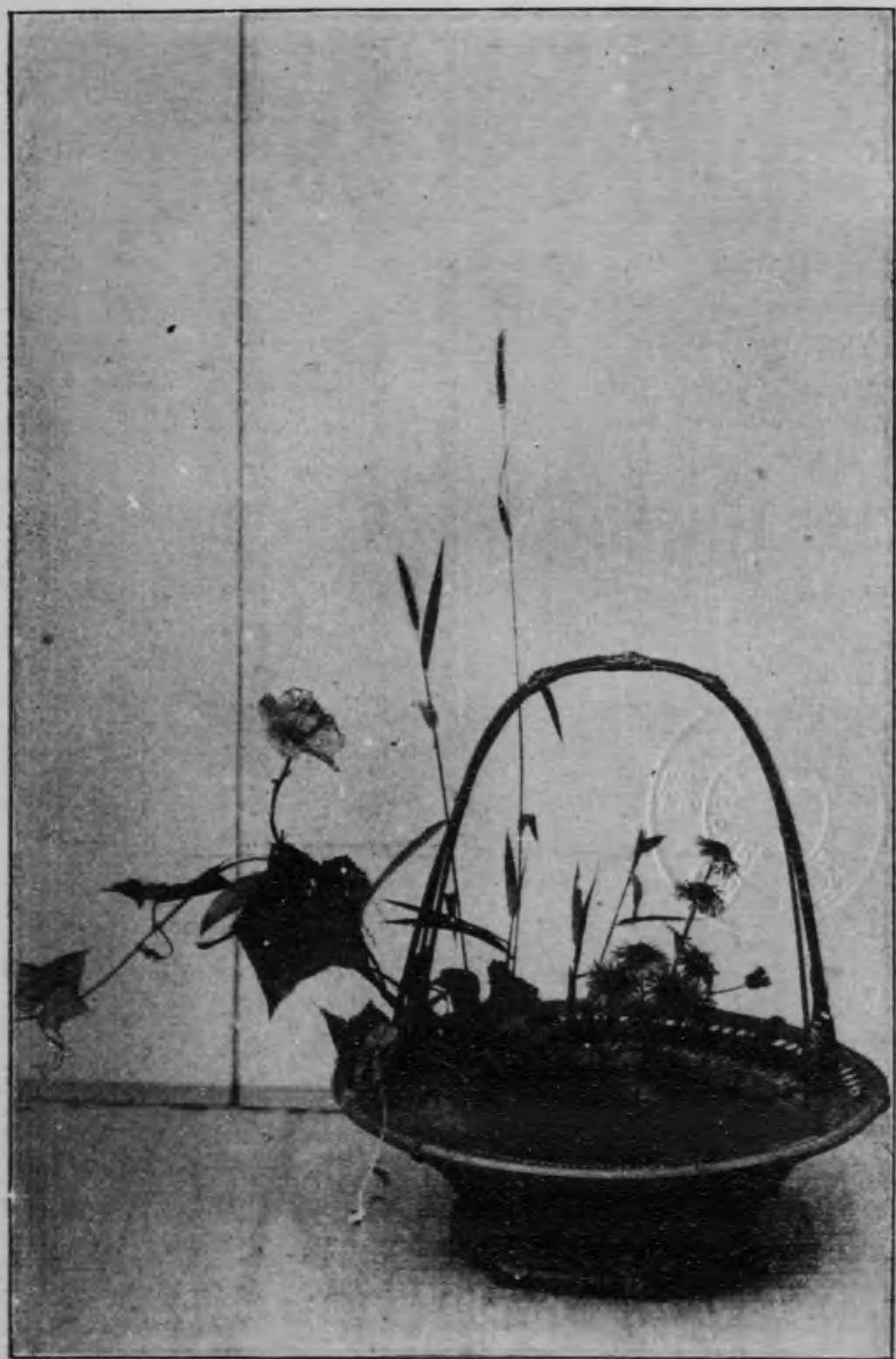
□自然本位、とは出所を明にして一盆中に山野池澤の状を現はす様に總て自然を主とする盛り方であつて、錦生とか景花とか文人生とか意匠花とか稱へる盛り方は一般に此種に屬するのである。

即ち山野に生せる植物は野生的に水草は水邊に生せる如く自然の風趣を現はして盛るのである。

陸を現はした處に水草を盛つたり水面の處へ陸のものを盛つたり、水陸のものを同株に盛つたり花や枝の配置を誤まつたりして草木の生育状態を害はない様に注意する事が必要である。

枝條も可成鉄を入れず自然の枝振りの儘のものを用ひ其配列もすべて自然生育の長短に準じて木性のものは高く草性のものは低く同一の草花にても高性の





花盛の位本然白

ものは高く低性のもは低く盛り又草木の性質に注意し莖葉より高く花梗を抽出するものは花を莖葉より高く盛ると云ふ風に自然の美を發揮させて清楚に盛らねばならぬ。

勿論此の場合に於ても色彩の配合に注意して見劣りのせぬ様巧妙に配色することが肝要である。

第八圖は自然本位の盛花の一例で主位には雜草たる、ゑのころぐさ(狗尾草)副位には絲瓜、客位には菊菜を挿したるもので此の一つの盛花によつて野邊の有様が鬚鬚として眼のあたりに浮んで宛ら田園生活の状態にあらしむる様な感じが生ずるではないか。

□色彩本位の盛花は色彩の配合を主として自然を従とする盛り方である。色彩の配合如何は快活なる感を與へ或ひは陰鬱な感を生せしめ吾人の精神上に及ぼす作用は甚大である故に巧みに配色して綺麗に華かに盛り上げる事に注意せねばならぬ。

元來花は天然のものである故、顔料を以て繪を畫く様に種々の色を捻出する





花盛の位本彩色

第九圖

ことが出来ない一般に花の色には派手なものが多く勢ひ對照の自由を缺きよき配合が出来難い場合があるものなれば一層使用する材料の範圍を廣めて自然には少々反すれども色彩の配合及美觀上野生の花に温室の花を交へたり陸生のものに水生のものを交へたり又は長き莖のものを短く使用する場合等がある。

青葉と赤又は紅。赤と黄と青葉。黄と白と青葉。青葉と白

と赤。紫と白と青葉。青葉と橙色と白。黄と茶と白

紫と赤と白。白と黄と赤。等は配合がよく。

褐色と紫。赤と紫。橙色と褐色。等の配合は何となく陰鬱

な氣持がして見榮がなく、斯様な配合は面白くない。

此の種の盛花は材料が主として濃艶なる西洋草花である故色彩に富める種々の花を巧妙に配合して盛り上げれば實に眼もさむる程美麗であつて自然の美を味ふよりは裝飾を主とする盛り方である故、洋室等の裝飾としては最も相應しいのである。

□色彩の配合、花の色は表情の最も深いもので極めて單純な色彩にても一入



の情を惹くに足るものである蓋し花の色は花の生命である故其配色に就ては充分に美術眼を配らねばならぬ、色彩は其種類多けれども其性質に因つて冷温の二種に區別することが出来る。勿論色彩に對する寒熱感人は人の氣持にして表情的感想に屬するものである。

三原色を寒、熱、色に分つ時は黄色と赤色は熱色に屬し青色は寒色に屬し而して熱色たる赤と、同じ熱色の黄との配合より成る橙色は素より熱色に屬するのである。

熱色。黄、赤、橙、黄緑、黄橙、赤橙、赤紫、白、淡灰。  
寒色。青、青紫、青緑、黒、濃灰。  
中間色。緑、紫、灰。

春の盛花は温かき賑かな感を與へる様に熱色のものを用ひ、夏の盛花は涼しき感を與へる様に寒色に屬する花を用ふ故に冬の盛花に熱色のものを用ふれば温かく感ぜらるゝものである。

而して之等色彩の配合には大體左の四通りの別がある。

一、同種色の配合

二、類似色の配合

三、餘色の配合

四、對立色の配合

一、同種色の配合、單一なる色彩を其濃淡、明暗に因つて區別する配合であつて一般に清楚にして地味温和な感がある。

二、類似色の配合、此の配合は一つの色相と其色相の含まれたる他の色相とを配合するのであつて相方とも共通の色を有する場合である即ち赤色と黄色と橙色とを配した様なもので一般に優美な感がある。

三、餘色の配合、此の配合は一つの原色に他の間色を加へたる配合であつて即ち青に對する橙、黄に對する紫、赤に對する緑等の配合である此の色調は反對の色の對照である故華やかで春や冬の盛花に應用すれば温かな感じを與へるものである。

四、對立色の配合、此の配合は全然性質の異なつたる極端なる色相即ち、赤と青、青と黄、赤と黄、等の配合であつて其對比最も烈しく濃麗華美な感がある。



### 九、果物の盛花

『盛果』と云つて果物はかりを籃に盛る事は古くから行はれ、又豆柿や木瓜や佛手柑の様な純觀賞的の果實は今までから盛花として活けられてゐるが柿や林檎や枇杷の様な食用に供する立派な果實はまだ盛花として廣く用ひられてゐない、この様な果實に花を配して盛つた盛花は特種の趣があるもので我國の様な



花葉實の美を併せて賞する人種には美しい果實の美を閑却する事は出来ない。  
一體花と葉と實は觀賞上水魚の關係を有するもので花や實が如何に美しくても綠葉がなければ其過半の趣は減じてしまふ又葉ばかりにても殺風景に感ぜらる、どうし

ても兩者の配合を焚たねばならぬ。

寂寥たる秋の盛花に林檎の累累たる果實や朔風野に荒んで總ゆる草花の寒氣に感むの時黄金色をなす果實と濃緑の滴る葉を有する柑橘類は淋しい床の間を賑やかすものである。

又果實を贈物とする場合に果實のみを無作法に籃とか盆に盛るよりも一歩進んで夫れに時折りの草花を添へて盛花とする時は果實を一層引立たしめて體裁よく貰つた方も何となく麗しい心地がして充分觀賞を盡した上で食用とせられ觀賞と食用の二方面の用に供することが出来て一舉兩得である。

盛り方は普通の花ばかりの盛花と同一であつて副位と客位に主として果物を用ひ主位や補としては縁滴る如き細かき葉や果物其もの葉や花園や温室咲の美しい花を添へて色彩の配合に注意して恰好よく盛るのであつて葡萄の様な果實や、スキートビーや時計草の様な卷絡性のものは籃の手にかからせて盛ればよい。

#### □ 盛花に適する果實



盛花と水揚  
 梅、栗、櫻桃、柿、柑橘類、須具利、柘榴、無花果、林檎、梨、葡萄、  
 桃、杏、李、枇杷、莓、等。

一〇、蔬菜の盛花



蔬菜の盛花も果實の盛花と同様に掬すべき趣味のあるものである。  
 蔓付の南瓜や蕃椒や茄子を盛つて夫れに雜草たる、かやつり草や、なづな(ペンペン草)や、つゆ草等を添へたるは野趣的で床しく知に生せる其儘の風趣を味ふ事が出来る。

又蕃茄や甘藍や豌豆を盛つてそれに細かい綠葉や美しい草花を配すればよく引立つて目新しく賑やかな盛花が出来る。

□盛花に適する蔬菜

茄子、蕃茄、蕃椒、蔓荔枝、南瓜、胡瓜、越瓜、絲瓜、刀豆、石刁柏、甘藍、花椰菜、玉苣荬、菜豆、豌豆、蚕豆、茗荷、土當歸、等。

一一、挿入上の心得

一、和室

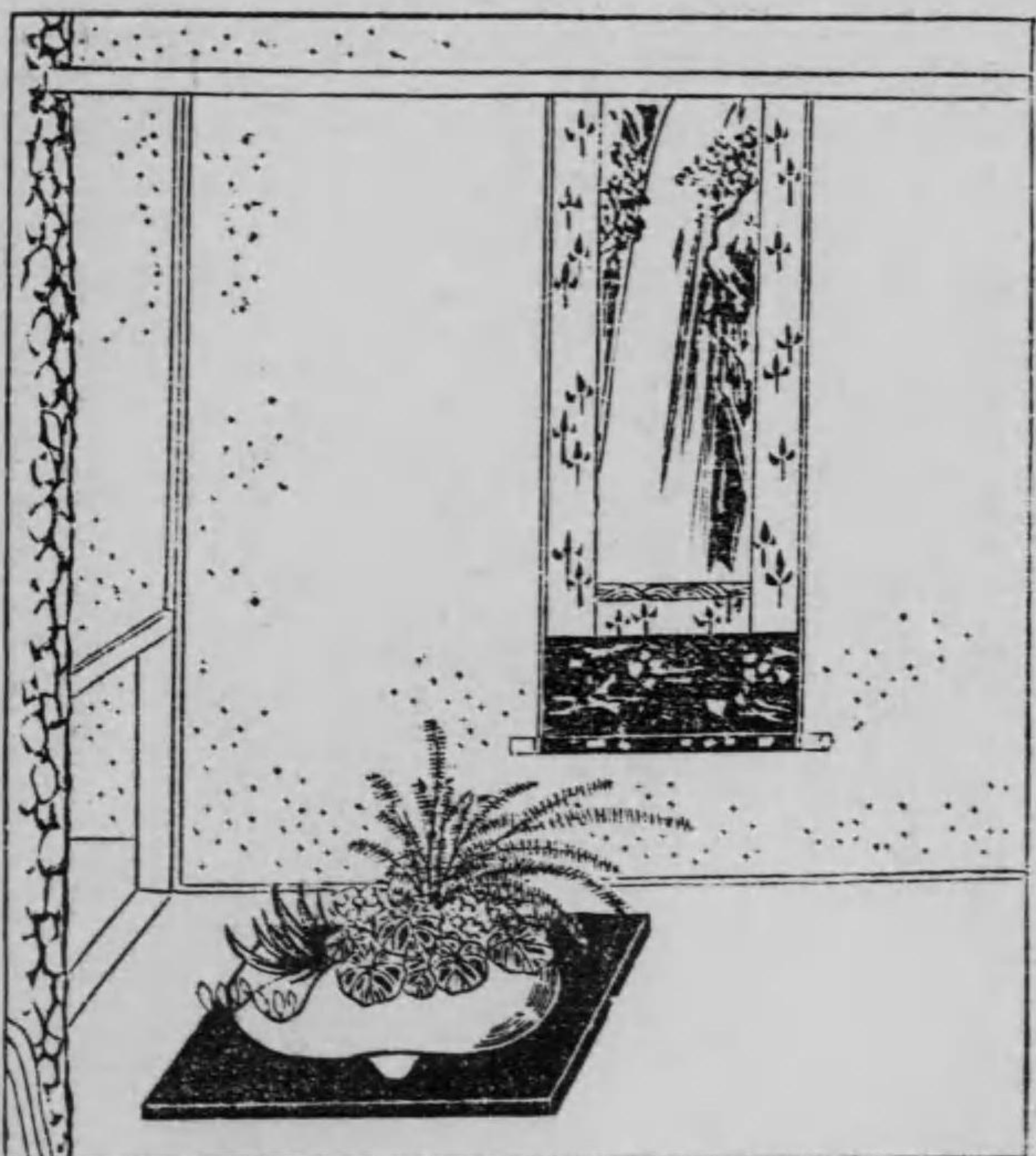
□床、日本の室内なれば盛花は先づ床に置くのが普通である、床は座敷の廣狹に依つて大小があるものなれば盛花も床に調和する様に大なる床には雄大な感じが起る様に自然の枝振りのものを可成手を入れずに粗放に盛り小なる床はこれと反對に密に盛るべき必要がある。

小なる床に粗放に盛る時は床と不調和で見苦しく大なる床に密に盛る時は材料を澤山に要し其上如何にも盛つた様で自然の風情を殺ぐ嫌がある。



第十二圖

盛花と水揚



而して床には通例中央に軸が掛り居るものなれば盛花は軸の短かき時は中央に置き軸の長き時は花に因つて書なり書なりの一部分が遮られて見え難き故軸の右又は左に置くのである、此の場合には左右の別によつて盛り方を更へねばならぬ、軸の右側に置く花は左活けの花即ち本勝手に盛り左側に置く花は第十二圖に示す如く右活けの花即ち

左勝手に盛るのである。

□軸との調和、軸と盛花とが互に其趣を扶け合ふ様に配合する時は双方とも引立つて一層感じを深くするものである、即ち書幅なれば其詩や歌の文句の意味によつて夫に相應する花を盛るのである例へば梅や櫻を詠じたる歌や句には櫻や梅を主として盛り英雄の書には常盤木とか櫻等を雄々しく盛り忠臣の書には、かんばしき香の菊や薔薇、牡丹等を主として盛る様なもので書幅なれば其畫によつて例へば水邊の景色なる時は萍蓬とか葦とか睡蓮等の水草を、瀑布の圖には楓、月の圖には梅、櫻、秋なれば萩、すもみ、女郎花等の秋草を、鷺の圖には柳、芙蓉、黄鳥の圖には柘榴、鶴の圖には老松、蟹の圖には野菊、雪景の圖には松、竹、水仙、菅公の圖には梅、高德の圖には櫻、美人の圖には美しい草花等がよく調和するものである。之に反して日出に鶴の圖に蓮、神佛の像に美しい西洋草花、軍人の書や勇壯なる詩歌に秋草等は對照が面白くない。

挿入上の心得



ある、即ち黄色の壁なる時は紫や白の花は調和がよいが黄色や赤色は引立たぬ、花器も洋風のものなれば主として西洋の草花を賑かく盛り籠等の風雅な花器なれば在來の草木を盛る方が遙に趣がある、又軸の表装も壁の色と同様に調和を缺かない様に注意すべきである。

二、洋室

□テーブル上の盛花、洋室は日本の室内と異つて油畫や水彩畫を美しく飾られて華かである故在來の風雅な花卉よりも美しい色彩に富んだ艶麗な草木が適當である。

應接室のテーブルや食卓の上に置く花は四方より眺むる故、孰れより見ても表裏のない様に四方正面に平たく腕を伏せた様に盛るのである、即ち前面

第三十圖



花盛の上ルブータ

は右寄を高く左寄を低く後方は左寄を高く右寄を低く、前後反對に恰好よく全體に低く主位も普通の場合よりすつと低く盛るのである客とテーブルを隔て、對座するものなれば普通の盛花の様に高く盛る時は客との視線を妨げるからである。

□机上の盛花、壁の前や化粧室や鏡の前の机上等へ裝飾として置く盛花は三方正面として中心は割合に高く前面には花園や温室咲の艶麗なる草花や綠葉を適當に高低をつけて配置し美しく恰好よく盛るのである、其他室の片隅の卓上等に置く花は一方正面として盛ればよい。

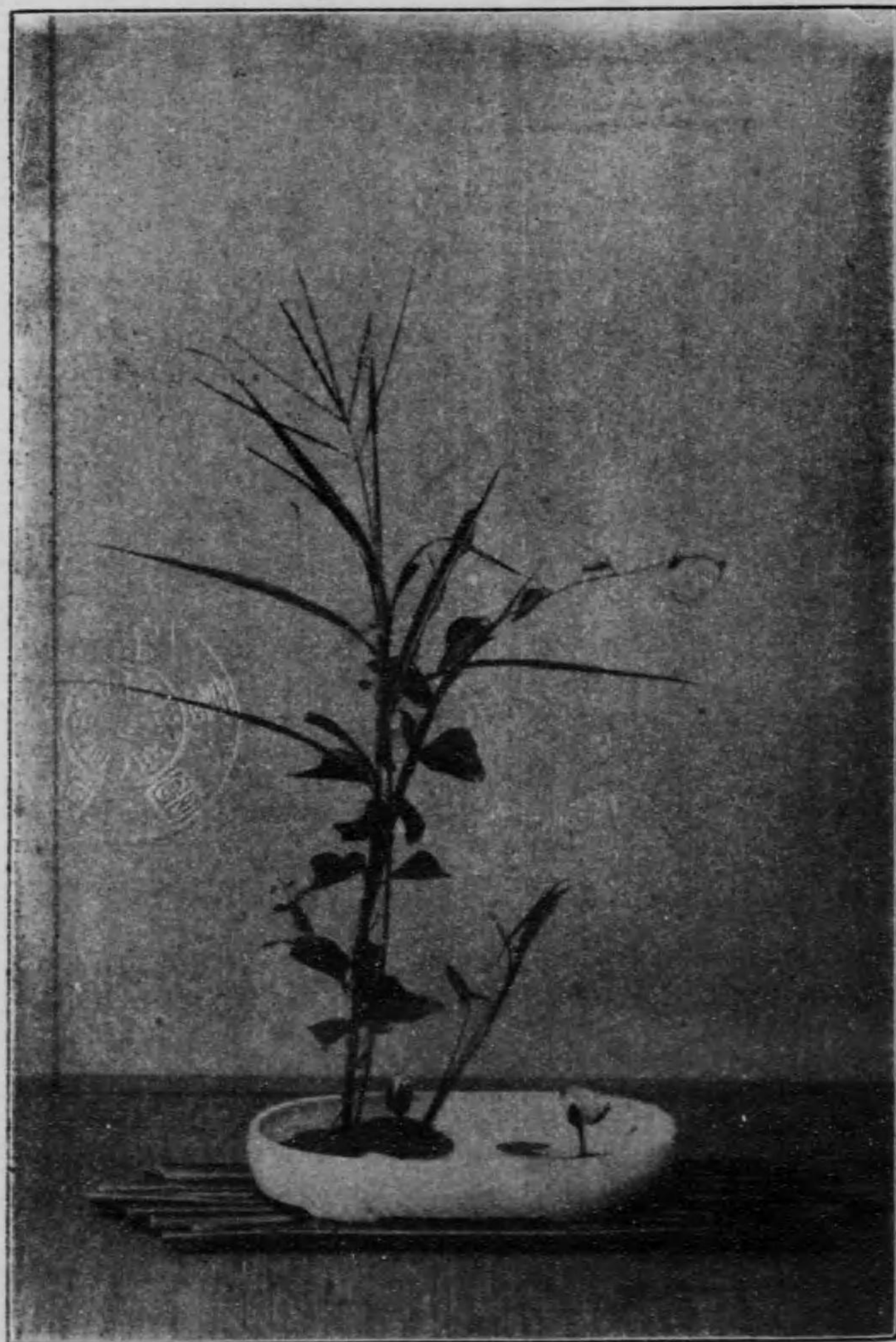
三、季節による變化

草木は何れも四季折々の風情があつて四季に變化するものなれば盛花をなすにも四圍の状態に應じて其氣分を現はし自然の姿に遠ざからぬやうに注意せねばならぬ。

□春の盛花、野邊や山邊の千草も花園の野草も春の装ひ時を笑顔に千紫萬紅とりくりに艶を争ひ芳を競つて咲き亂れ一年中に於て最も華やかな時期であ



花盛の夏 圖四十第



挿入上の心得

盛花と水揚

る故に春の盛花は自から艶麗に暖かな気分を現はすべく又材料も豊富である故に色彩の配合を巧に水面を見えざる位に賑やかに盛るのである。

□夏の盛花、蟬は梢頭に鳴いて炎熱をつたへ後庭の草花はうなだれて一掬の水抹を乞ひ炎帝の猛威愈々熾にして吾人は宛ら熔鑪爐中に座して熱火毒烟の間に煩悶呻吟するの時盆裡に花を挿して清涼の風趣を現はし熱暑の晝、氳氣の夕其處に萬斛の涼味を掬して終日の疲勞を慰さむる亦妙ならずや。

夏の盛花は瀟洒にして涼味津津たるを覺えしむる様にすることが主眼である材料は草、睡蓮、萍蓬、太蘭等の水栽植物或は線滴る如き綠葉に淡色の花を配して春と反對に可成枝数を減じ水面の見ゆる様に盛るのである第十四圖は蔓草の纏ふた芦に澤瀉と睡蓮を配して夏の景色を現はした自然本位の盛花である。

□秋の盛花、金風颯々として落錦を捲き艶美を競し野山の八千草は亂れに亂れ優しき蝶も羽翼を碎かれて美人をして空しく馬鬼の土と化せしめ秋の衰れを感じせしむ、然れども萬山の紅葉錦の如く原野の風色又一入の趣あり、一年中最も韻致に富むの時にして云ひ知れぬ幽遠な雅趣が味ひ得らるゝのである。



花盛の秋 圖五十第



盛花と水揚

秋の盛花は野趣的に盛るのが主眼である潑刺たる生から沈黙の死に移るの時であるが故に其氣分を現はして紅葉せるものや、又、可憐な秋草をもて寂寥を感ずる様に盛るのである。

併し之れと反對に淋しく暮れ行く秋を盛り返す様に特に艶麗なる花を選び用ふることもあるが之は主として洋室の裝飾に供する位のもので日本の室内には調和を缺き全く自然の風情を没却せるものと謂はねばならぬ。

第十五圖は末枯の景を現はせるものにして住吉公園の蓮池の景を其儘盆中に收めたものである。

蓮に燕子花や雜草を交へ蓮は實を結んで葉の一つは半ば枯れはて、水中へ折れ秋の哀れを偲ばせて満目荒涼の詩趣が津々として湧くを覺ゆ。

□冬の盛花、寒風凜烈肌にしみ朝に霜柱を迎へ夕に木枯の風を送り四隣寂寞として哀れを催す時である、故に冬の盛花は冬らしき感想を喚起する様にするのであつて寒氣を凌いで咲き出でたる梅や寒菊や水仙の殊勝なる風姿は一入床しき心地がするものである又温室咲の洋草や早咲の珍花を色彩の配合よく美



しく盛る時は返つて温かき氣分がして宜いものである之等は單に裝飾上の目的として、強ち排斥すべきものではないと思ふ。

四、禁枝

古來より我國の插花には禁枝と稱へて種々な制限があつて用ふる事を忌むのである盛花では插花ほどに注意せなくても宜いが禁枝のものは取りも直さず形

- 左右同じ長さに丈を較べる枝。
- 眞の枝を見切り遣ふ枝。
- 兩方へ同じ長さに引張り出たる枝。
- 枝先兩方へ同じ様に股になりたる枝。
- 枝葉の同じ様に並ぶもの。
- 枝と枝と十文字になり又は交叉せるもの。
- 枝先が客に向ふもの。

五、祝儀に忌む花

盛花はあらゆる草木を材料として盛ることが出来るものなれども古來の風習として祝儀に限り用ふることを忌むものがある故多少心得ふべき必要あるを以て左に主なるものを擧げむ。

- |          |          |         |
|----------|----------|---------|
| ○ みつまた   | ○ しをん    | ○ やつで   |
| ○ ほうせんくわ | ○ ひがんばんな | ○ れんげ   |
| ○ ふち     | ○ はぎ     | ○ かんび   |
| ○ やまぶき   | ○ かるかや   | ○ かはほね  |
| ○ うのはな   | ○ ちしや    | ○ くなし   |
| ○ ぼけ     | ○ りんだう   | ○ きぼうし  |
| ○ きよやう   | ○ もくせい   | ○ くわんざう |
| ○ だんどく   | ○ をみなへし  | ○ おにあざみ |
| ○ むくげ    | ○ ふちばかま  | ○ けし    |
| ○ すゞき    | ○ もくれん   | ○ しやくなげ |
| ○ おしろい   | ○ ちんちようげ | ○ びわ    |



- をぎ
- けいとう
- ざくろ
- おにゆり
- もくふやう
- いちはつ
- ゆうがほ
- 百日紅
- みぞはぎ
- れんげう
- にはとこ
- こぶし
- おにはす
- おにのしこ草
- あちさい
- おにのしこ草
- つゝじ
- もみじ
- すはう
- なしの花
- いふ
- よし
- すもゝの花
- あわゆき草

其他異名の悪しきもの、一定の形を損せるもの。

又新築や移轉祝には赤色の花及『紅』『赤』『ひ』の文字を用ふる花を忌む之等は御幣擔ぎの類で餘りに擔ぎすぎた嫌がある。

六、儀式の花

祝賀の盛花は喜びの氣分を現はして艶麗なる花を添へて賑かく盛り佛事の時には静肅に哀悼の感が出る様に可成濃麗な色彩の花をさけて白色本意に盛るべ

きである。

- |  |                            |                         |          |                        |   |                             |  |                                    |
|--|----------------------------|-------------------------|----------|------------------------|---|-----------------------------|--|------------------------------------|
| 新                                      | 紀元節                        | 神武天皇祭                   | 天長節      | 出産祝                    | 結婚祝   | 還暦古稀祝                       | 一般の吊祭                                  | 其他三月の節句には紅白の桃、櫻、海棠、五月の節句には玉蟬花、溪蓀、よ |
| 年                                      | 節                          | 祭                       | 節        | 祝                      | 祝   | 祝                           | 祭                                      | 挿入上の心得                             |
| 松、竹、梅、水仙、福壽草、椿、萬年青、甘藍、薔薇、藪柑子、臘梅、百兩金、等。 | 梅、竹、薔薇、素心臘梅、山茶、珊瑚樹、桃葉珊瑚、等。 | 櫻、桃、木蓮、薔薇、麻葉繡毬(すいかけ)、等。 | 菊、ダリヤ、等。 | 松、せんだん、牡丹、月桂樹、竹、南天燭、等。 | 松、竹、其他變らぬ爲め常盤木を主として用ふ、松は夫の義を表はし竹は婦の貞操を表はす、草花を用ふるなれば濃色のものをさけて白色又は淡色の變らぬ色のものを用ふるのである。 | 松、薔薇、牡丹、菊、萬年青、竹、南天燭、蘭、百合、等。 | 泰山木、白木蘭、蓮、白菊、菩提樹、天女花、桐、檜、厚朴、素馨、ねんじゆ、等。 | 四三                                 |



もぎ等。七月七日の七夕には桔梗、苧蕈、女郎花。九月九日重陽の節には菊を主として盛り、宴會の席上の花は總て雄大に盛り上げて賓客をして其美觀に酔はしむる様に工夫することが必要である、主として若い婦人や子供の集合なる時は綺麗に賑かく盛り、風雅な人の集合には雅致に富む様に盛らねばならぬ。

七、毒ある草木

植物の中には莖、葉、花、根に毒を有するものあり之等は可成用ひざる様にし若し已むを得ずして用ふる際には充分に注意して取扱はねばならぬ。

- のうせんかづら
- へらおもだか
- のげいとう
- きやうちくとう
- はしりどころ
- てうせんあさがほ
- 紫葳科
- 澤瀉科
- 莧科
- 交竹桃科
- 茄科
- 茄科
- きんぎんぼく
- にかき
- ゑごのき
- まるばのほろし
- ひよどりじやうこ
- いぬほづき
- 忍冬科
- 苦木科
- 齊墩果科
- 茄科
- 茄科
- 茄科

- どくせり
- くさぎ
- たうざり
- あせび
- いけま
- つなそ
- さつまふち
- ちんちやうげ
- どくうつき
- いらくさ
- のぐるみ
- なべわり
- みやましきみ
- とうだいぐさ
- 織形科
- 馬鞭草科
- 馬鞭草科
- 石南科
- 蘿麻科
- 田麻科
- 瑞香科
- 瑞香科
- 毒空木科
- 毒空木科
- 蕁麻科
- 胡桃科
- 百部科
- 芸香科
- 大戟科
- どくにんじん
- はへどくさう
- れんげつゝじ
- ねちき
- ふちうつき
- つたうるし
- こせうのき
- つりふねさう
- しきみ
- どくだみ
- やまごぼう
- こくさぎ
- いぬざんしやう
- たかとうだい
- 織形科
- 馬鞭草科
- 石南科
- 石南科
- 馬錢科
- 漆科
- 瑞香科
- 鳳仙花科
- 木蘭科
- 三白草科
- 商陸科
- 芸香科
- 芸香科
- 大戟科

挿入上の心得







圖 六 十 第



盛花と水揚  
主位、と各位、に名残りノ菊。副位、に寒牡丹。を盛りたる左勝手の盛花  
四八

圖 七 十 第

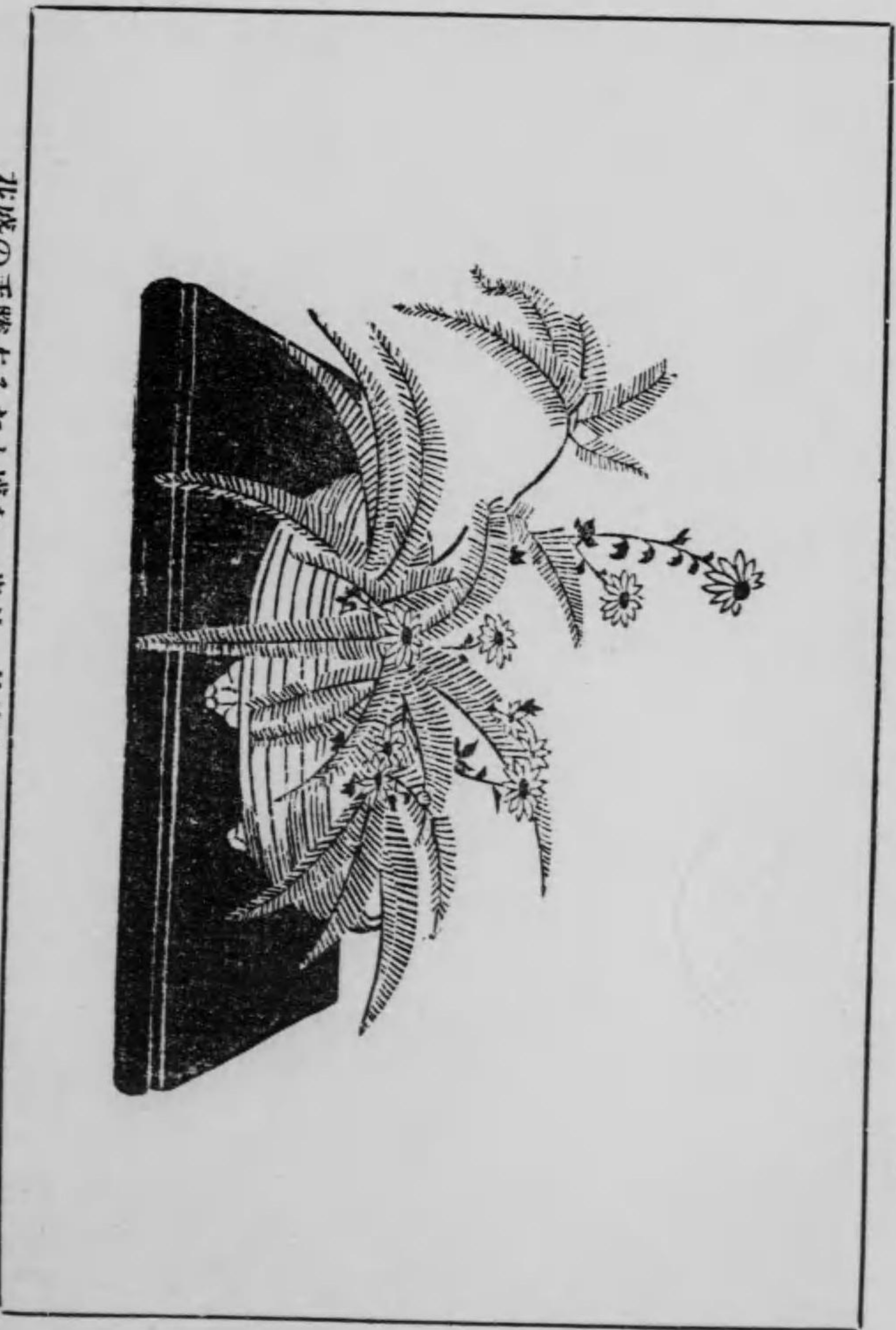


主位、と副位、へメロカリス。客位、あさみ、マガレット。を盛りたる本勝手の盛花  
盛花圖解  
四九



盛花と水揚

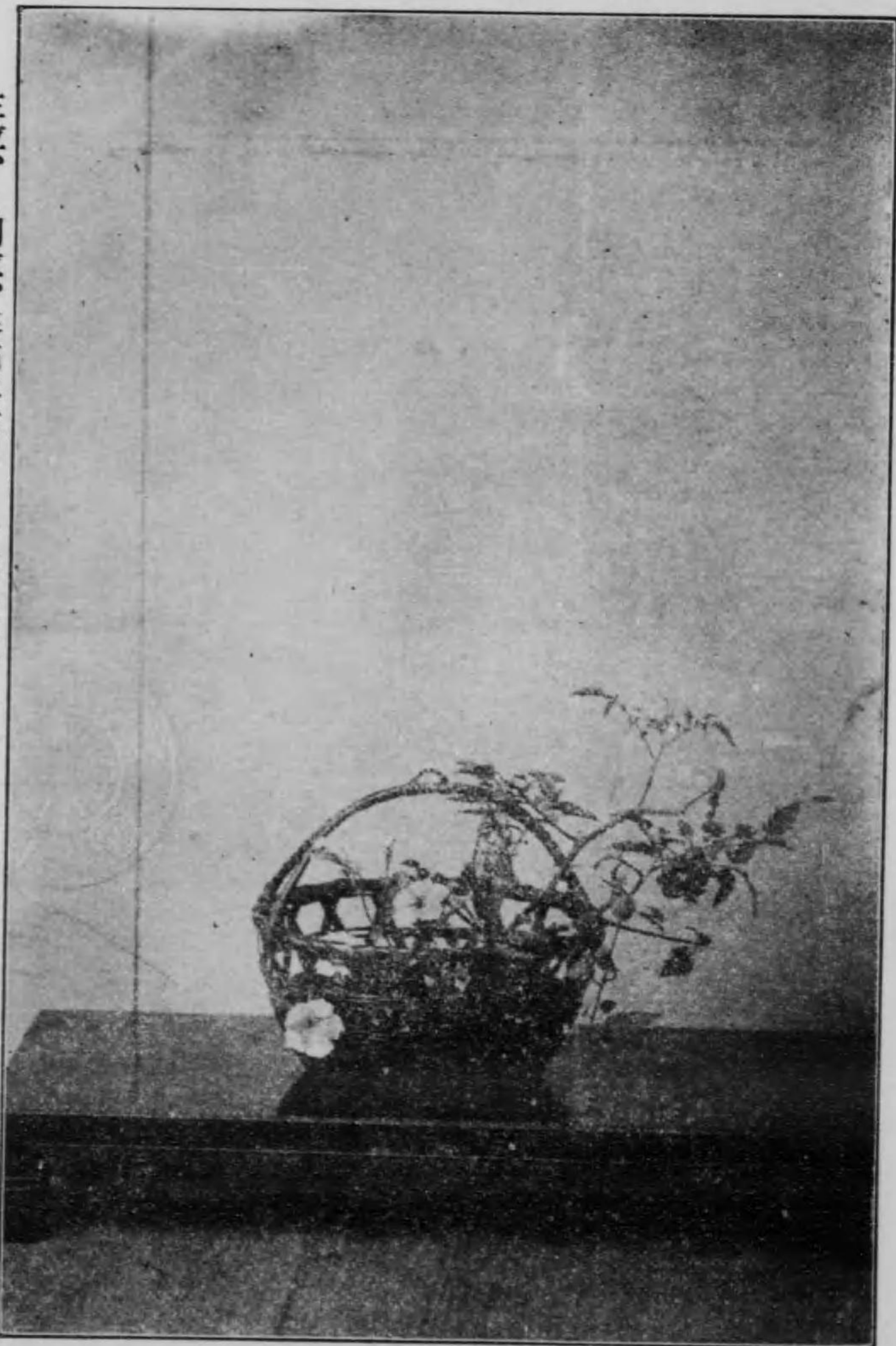
五〇



花盛の手勝木るたり盛を。齒羊、位客と、位副。菊山、位主

第十八圖

第十圖



主位、と副位、蕃茄トマ(ポアール)。客位、ベチユニヤ(つくばね朝顔)の盛花  
盛花圖解  
五一



圖 十 二 第



主位、アマリリス。副位、糸桔梗。客位、牡丹。を盛つたる左勝手の盛花  
盛花と水揚  
五二

圖 一 十 二 第



瓢(ひし)に大菊と小菊との盛花  
盛花圖解



圖二十二第



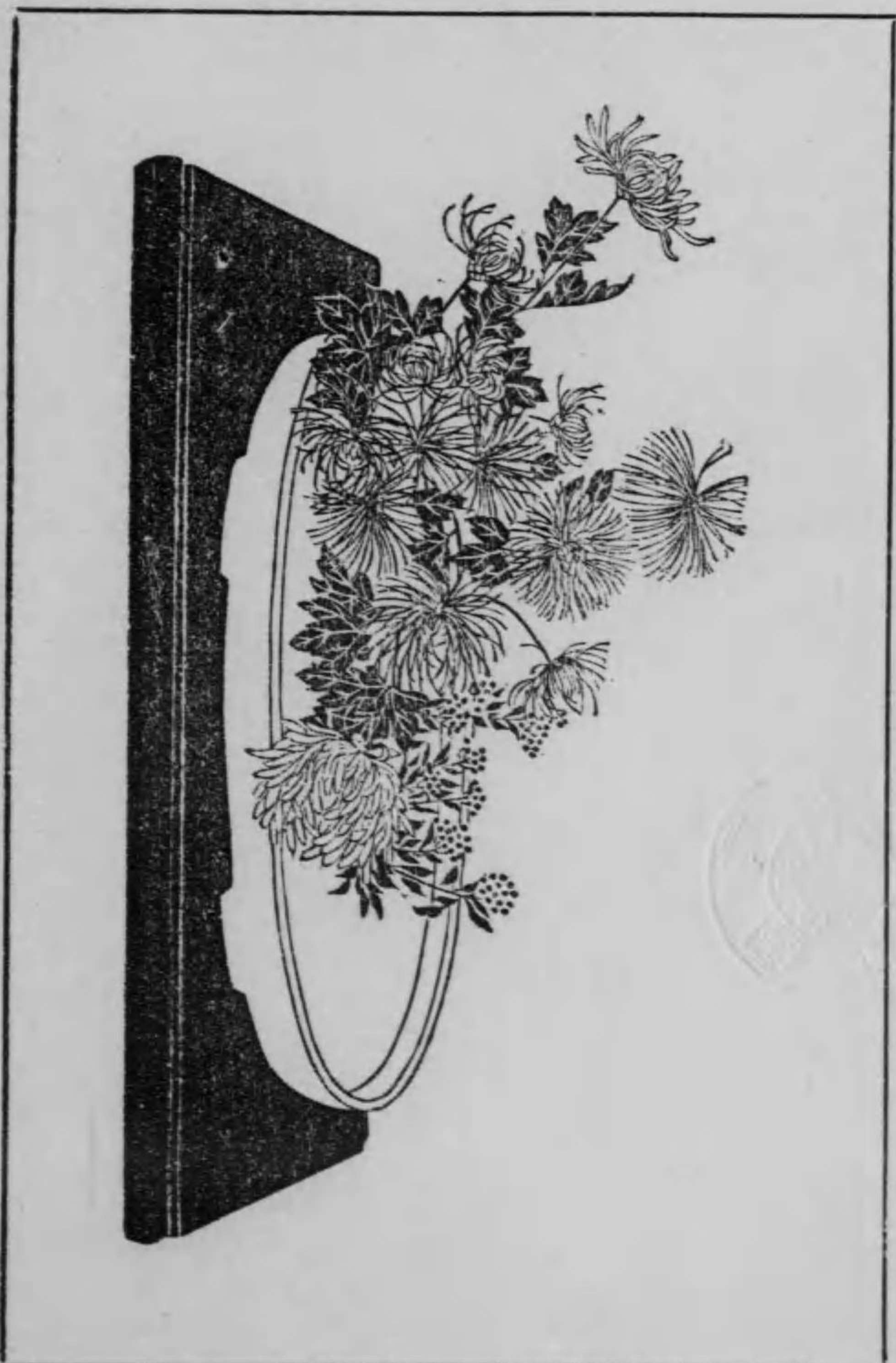
フツギ、位客と、位副に、紅來雁、位主  
現を秋初てし配を、(こしでな糸)ライ  
花盛たしは

第十一圖





盛花と水揚



五六

第二十四圖

花盛の式一菊



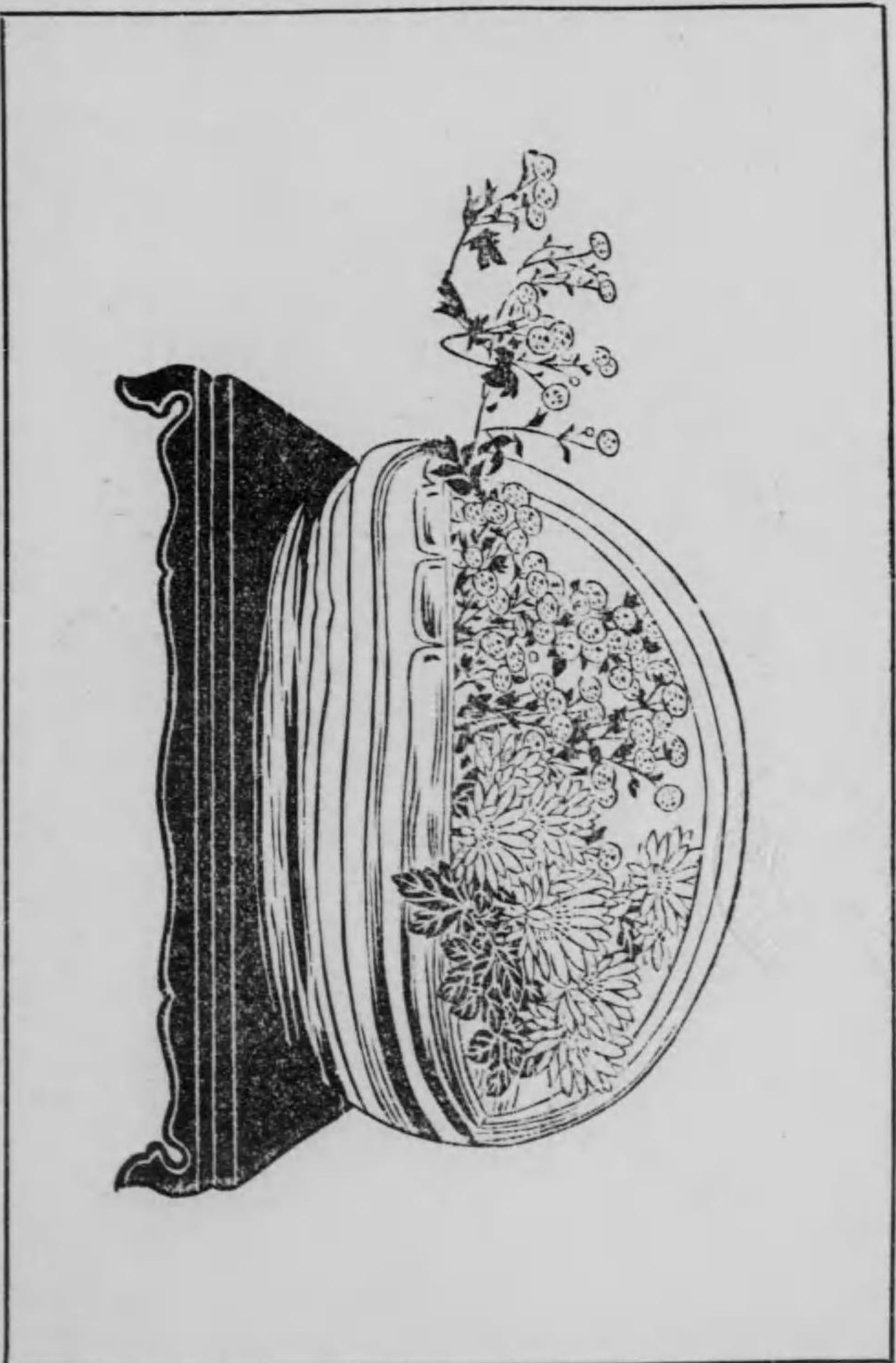
第二十五圖

盛花圖解

花盛の式一菊野

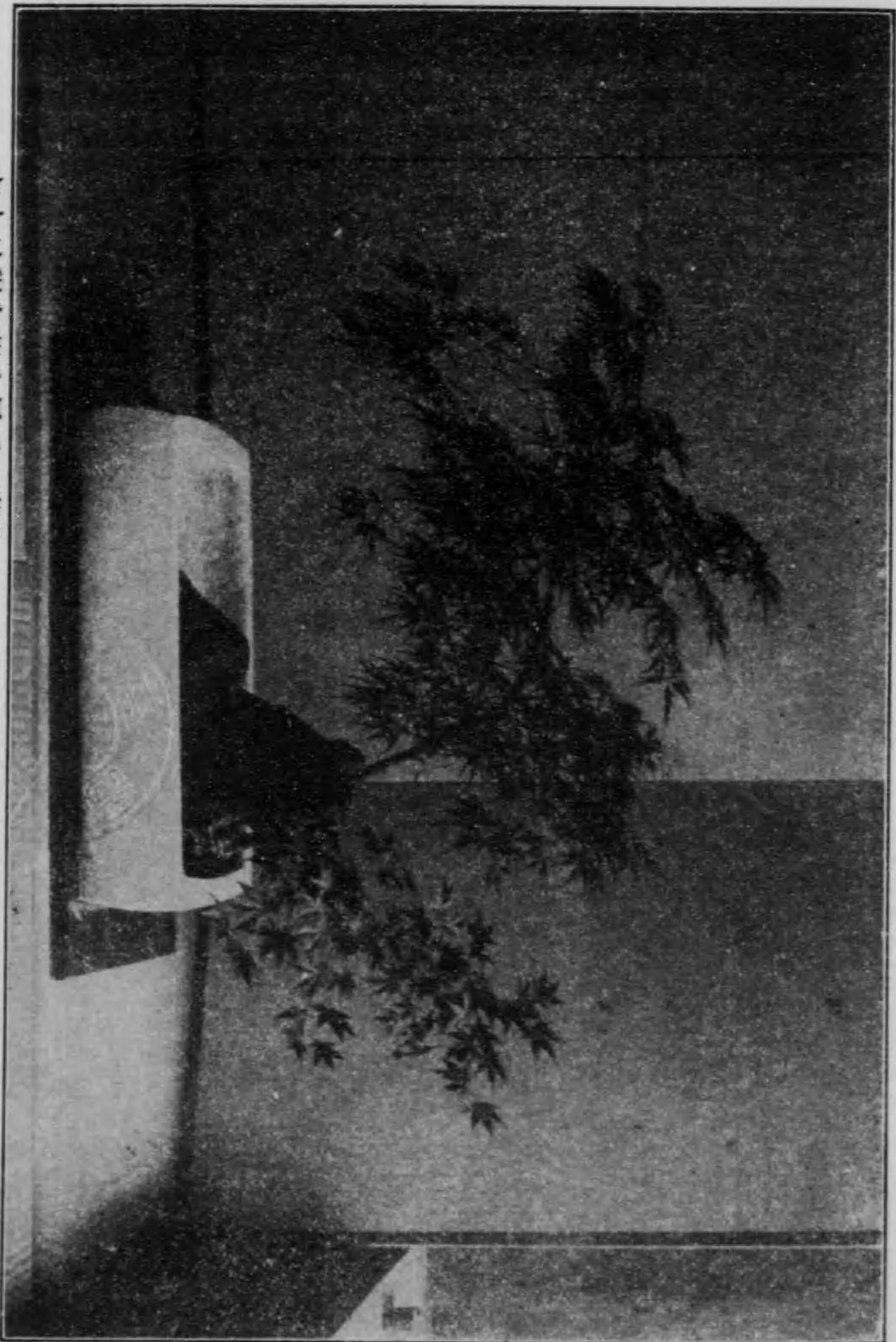
五七





花盛の手勝手本たつ盛を。菊大、位客。菊小、位副と、位主

第二十六圖



たしは現を想る居てつ茂生へ上のれ流の谷か楓て見と山を石し配を右に楓青  
るあで方け活いし涼てしと花盛の夏でのも  
五九

花盛圖解

第二十七圖



圖 九 十 二 第

主位、シヤスタデジ。副位、石ノ柏(イヌガシ)。客位、ヘメロカリス。を盛つた本勝手の盛花  
盛花圖解  
六一



圖 八 十 二 第

盛花と水揚



花盛の夏たつ盛を。蓬(フキ)、位客と、位副。花子(ハナコ)と莞(カマ)、位主

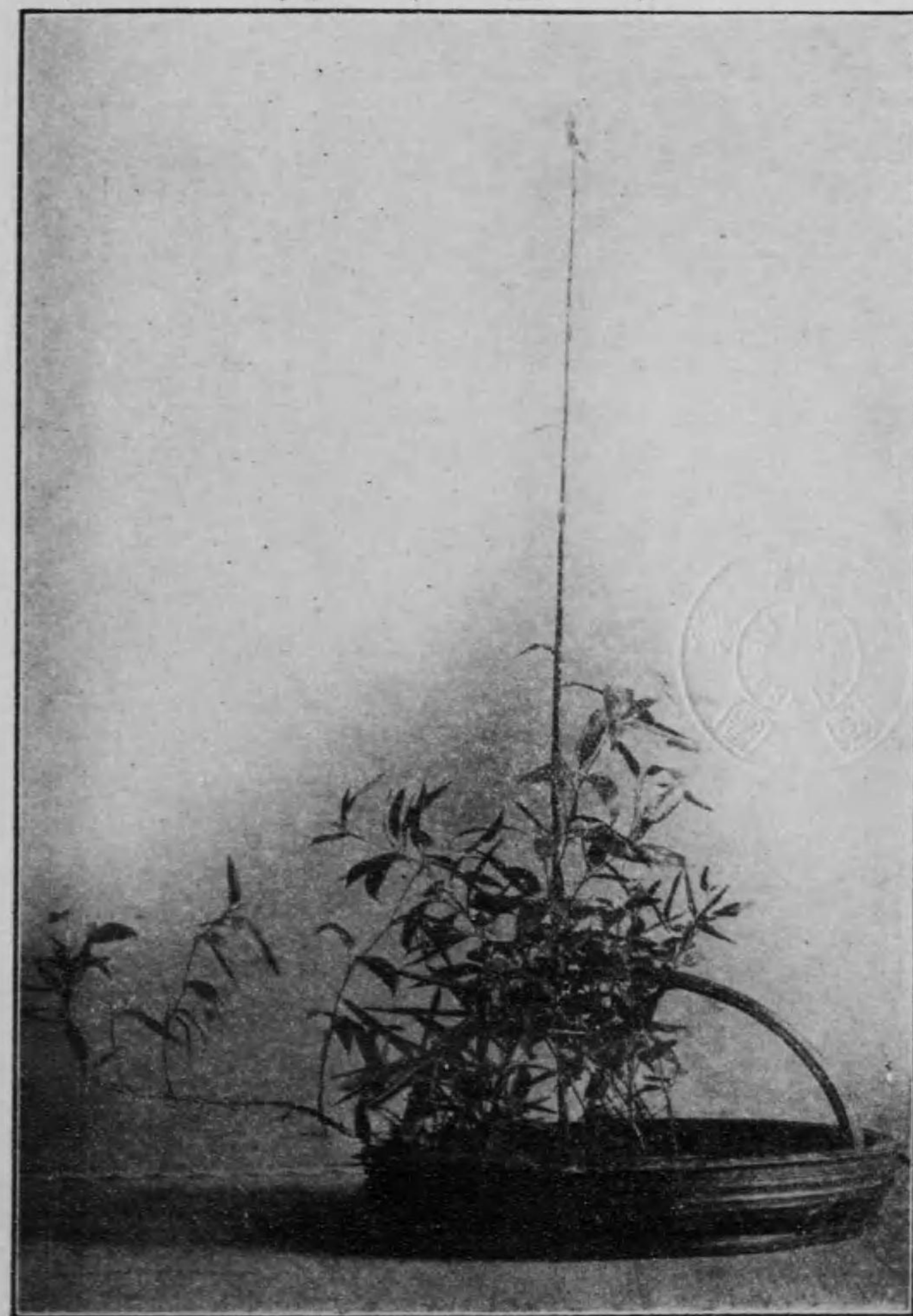


圖一十三第



主位、すゝき。副位、女郎花(しんぎ)。客位、桔梗。

圖十三第



盛花と水揚

花盛の式一竹用土

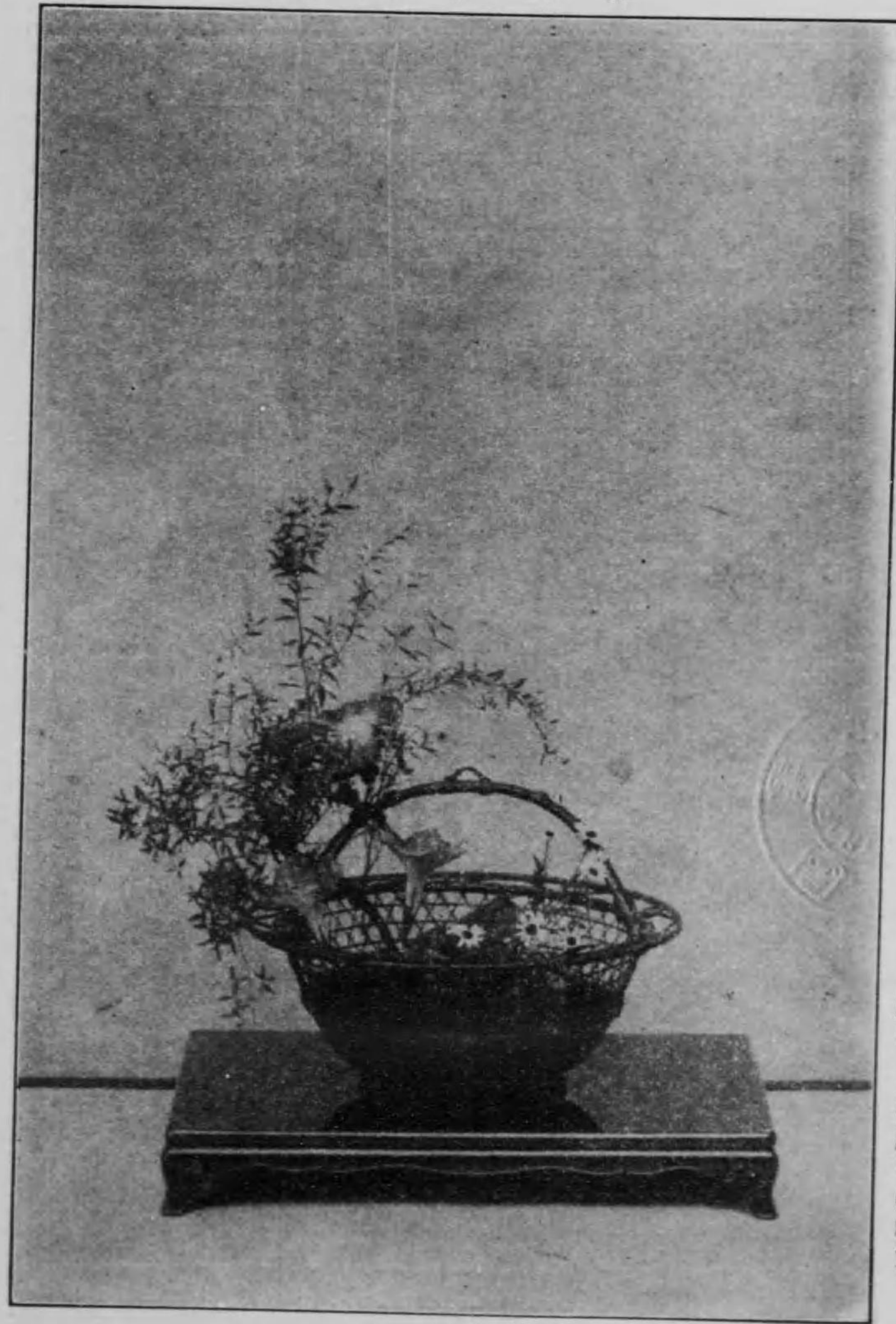


圖 三 十 三 第



主位、ヘメロカリス。副位、虎の尾。客位、紫陽花、はなぎく、撫子の五種活けの盛花  
盛花圖解  
六五

圖 二 十 三 第



盛花と水揚  
主位、珍珠花。副位、牽牛花。客位、シヤスタデジ。を盛つた本勝手の盛花  
六四



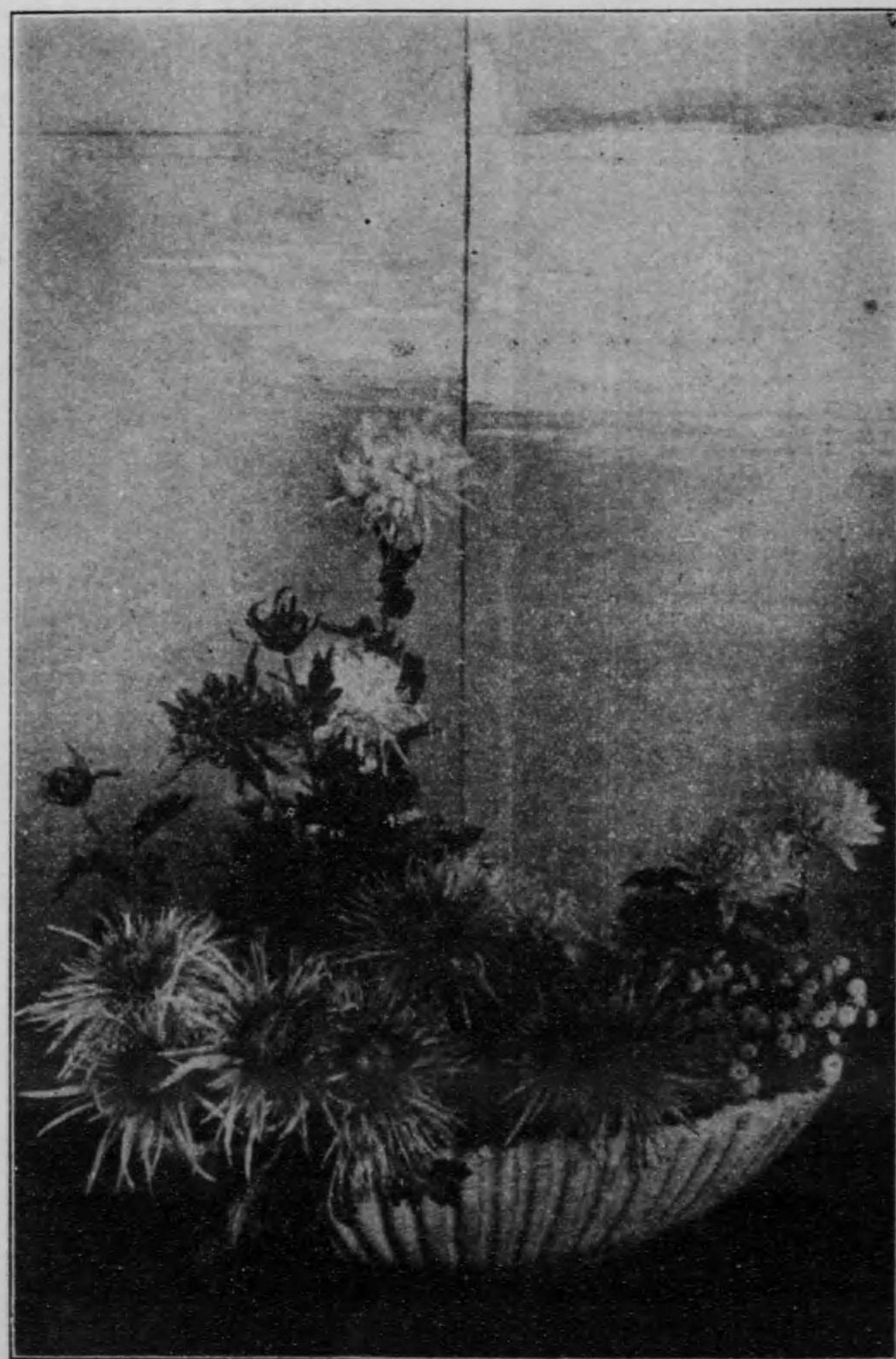
圖 四 十 三 第



上、盛花と水揚大菊と小菊との盛花。

下、羊齒と野菊の盛花

圖 五 十 三 第



菊一式の盛花  
盛花圖一解



圖七十三第

鼓  
盛花子  
圖解  
花(かほ)の  
投入



圖六十三第

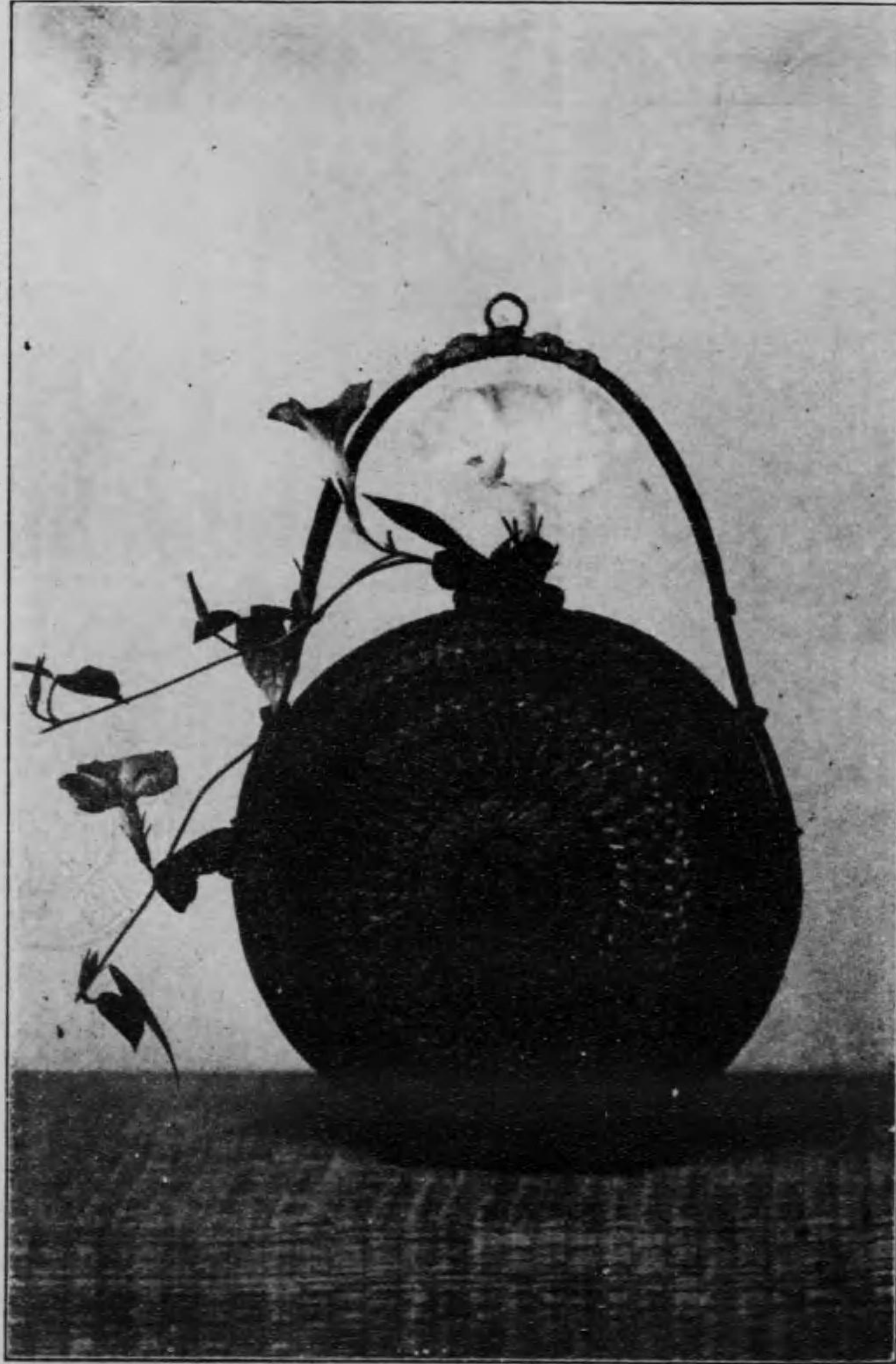
盛花と水揚  
釣花籃(柳里恭)へ主位、菊二種。副位、薔薇。客位、はまぎく、野菊。を盛つた盛花





圖九十三第

牽牛花(あはせ)の投入  
盛花圖解



圖八十三第

盛花と水揚  
すゝき、野薔薇、はまぎく、の投入





圖 一 十 四 第

双月籃に牡丹と菜の花とマガレットの盛花  
盛花圖解



圖 十 四 第

盛花と水揚  
落葉籃に通草(ひり)と胡蝶花(か)の投入





### 一三、材料の種類

盛花の材料としては有毒なものや悪臭を放つものを除いて我國在來の植物は勿論艶麗なる温室の栽培花や詩趣横溢せる野生の草花に至るまで、あらゆる植物を用ふることが出来て其種類甚だ多けれども便宜上これを觀賞の上より大別する時は左の三種となす事を得。

一、葉を賞するもの。

二、花を賞するもの。

三、實を賞するもの。

これ等に屬する和洋種の植物は其數頗しく到底一一枚舉に遑ない程であるが參考の爲め普通に用ひらるゝものを左に列舉することとせむ。

一、葉を賞するもの

□木性のもの

(在來種)

檜葉類 ○ 絡石 ○ 桃葉珊瑚 ○ 萬 ○ 鹽膚木 ○ 槭 ○ 蘇鐵 ○ 交讓木 ○ 常春

藤 ○ 松類 ○ 杉類 ○ 朝鮮楨 ○ 金松 ○ 羅漢木 ○ 斑入枇杷 ○ 肉桂 ○ 唐肉桂 ○ 紫金  
 牛 ○ 銀杏 ○ 榿 ○ 枹 ○ 厚皮香 ○ 金剛纂 ○ 柃木 ○ 要冬青 ○ 椴 ○ 竹柏 ○ 枸骨南天  
 ○ 梧桐 ○ 濱枹 ○ 迷迭香 ○ 檉柳 ○ 福良冬青 ○ 梅 ○ 椴 ○ 匍圓柏 ○ 伽羅木 ○ 木斛  
 ○ 琴糸南天 ○ 黃楊 ○ 茶 ○ 夏楮 ○ 榿 ○ 珊瑚樹 ○ 衛矛 ○ 沙木 ○ 羅漢松 ○ 杜松 ○  
 榿木 ○ 姥芽楮 ○ 滿天星 ○ 柯樹 ○ かうやうざん ○ このてかしは ○ はんてんぼ  
 く ○ 漢園竹 ○ 棕櫚竹 ○ 竹類 ○ 檜 ○ 榿 ○ 胡桃 ○ 榿 ○ 櫟 ○ 櫟 ○

(西洋種)

○ カスリナ ○ ポフラーブレアナ ○ キューブレス、エレガンヌ ○ ビナス、カナリ  
 エンシス ○ ツガ、カナリエンシス ○ セドラス、デオテラ ○ アグラオチマ ○ フヒ  
 ニツクス ○ ケンチャ ○ グレビリヤ ○ シノフィラム ○ デイフエンパキヤ ○ フ  
 ヒランサス ○ ミカニヤ、フーケリー ○ サイカス、サーシナリス ○ ハリコニヤ ○  
 ザミヤ ○ サンチエジャ ○ チリヤ、トメントサ ○ アセル、ブラタノイデス ○ アカ  
 リフアー、ミュサイカ ○ ポインセチヤ ○ アローカリヤ ○ フヒカス ○ アレカ ○  
 ハイヲフラルベ。



□草性のもの

(在來種) 木賊○骨碎補○蕨○孔雀羊齒○子持羊齒○石長生○一つ葉○谷渡  
 ○鞍馬しのぶ○馬蘭○石松○卷栢○龍鬚臺○澤瀉羊齒○深山羊齒○玉の緒  
 ○茵陳蒿○井口邊草○蛇眼草○雁來紅○星惠蘭○金惠蘭○萬年青○絞甘藍  
 ○羽衣甘藍○紫甘藍○玄鐵羊齒○石刁柏○斑入麩吾○蒲○紅葦○縞葦○西  
 湖葦○莞○蝶蘭○

(西洋種)

アジアンタム○アスバラガス、ブルモサ○ミクロレビヤ○ブテリス  
 ○セラギチラ○アスバラガス、スブレンゲリー○イソレビス○レツクスベコ  
 ニヤ○カラジウム○コリウス○イレシネ○パニカム○シネラリヤ、マリチ  
 マ○シペレス○シチス○マランタ○ペ、ロミヤ○ストロビランセス○ホリ  
 スチャーム○チフヒロレビス○アチランサス○フキトニヤ○ケレネー○ブ  
 ラセチリユーム(編蝠蘭)○トラジスカンチャ(シユスラン)○サンセビリヤ(千歳  
 蘭)○スミラツクス○ローエスジスカラー(ムラサキオモト)○アルタナンテラ  
 ○セビエラ○シーサス○ホヤカノーサ(サクララン)○アグロチマ○シストマ

グロチス○シサス、デスカラ○ピナス○ドキザンサ○アロカシヤ、ククラタ。

二、花を賞するもの

□木性のもの(灌木を含む)

(在來種) 牡丹○薔薇○櫻類○梅○鄒躑○杜鵑花○石巖○茶梅○椿○臘梅○  
 渡疏○瑞香○辛夷○金縷梅○沙羅双樹○金糸梅○珍珠花○棣棠花○土佐み  
 づき○伊豫みづき○おでまり○麻葉繡毬○石楠花○天女花○花海棠○木瓜  
 ○連翹○迎春花○胡蝶樹○素馨○栢榴○木犀○木蓮○山茱萸○百日紅○藤  
 ○紫陽花○柳○枇杷○金寶樹○茉莉花○賣子木○金糸桃○たらのき○はし  
 どい○わんじゆ○木槿○木芙蓉○厚朴○泰山木○金雀花○馬醉木○紫荊○  
 水蠟樹○菩提樹○合歡木○笑靨花○

(西洋種)

ヘリオトロップ○アカリファー○アブチロン○ランタナ○マガレツ  
 ト○ブーゲンベリヤ○セイテラ○ハシカン○クレロデンドロン○フクシヤ  
 ○アラマンダー○エリカ○デイラスマ○エローセマム○クロサンドラ○セ  
 ストラム○ペンタス○メラストマ○ポインシヤナ○ビトケーニヤ○ポーヒ



ニヤ○ミムラス○エリスリナ○ブランバコ○エレツクス○アカシヤ○ライ  
 ラツク○チランジャ○ヒュスカス○カルシヤ○フォルシヤ○ロードデン  
 ドロン○アフエランドラ○ルーリヤ○ハプロサムナス○ユーチャリス○オ  
 キシデンドラム○セルンスカナデンシス○コルヌス、マス○ラバーヌム、ヴル  
 ガレー○ラス、セシアラタ○デコリサンドラ○パーレリア、クリスタタ。

□草性のもの(塊根を含む)

(在來種)

芍薬○福壽草○寒菊○夏菊○秋菊○山菊○野菊○櫻草○夾竹草○  
 石竹○紅蜀葵○黃蜀葵○榮種の花○はるしや菊○百日草○千日紅○鶏頭○  
 日々草○鳳仙花○われもこう○秋明菊○ぎぼうし○あはもり草○黄すげ○  
 紫つゆ草○紅しゆん菊○松虫草○いちはつ○嫁菜○小濱菊○つめれんげ○  
 庭石菖○紫苑○けまん草○鋸草○向日葵○小判草○月見草○姫あやめ○ベ  
 んけい草○さもりんどう○はまぎく(吹上)○文鳥草○除虫菊○女耶花○四季  
 撫子○虎の尾○きりん草○斑入いすい○雪のした○花たで○花あま○から  
 まつ草○鹿の子草○とりかぶと○だんぎく○がんび○時鳥草○羽衣草○だ

るま菊○いとらん○錨草○風船かづら○秋海棠○龍馬草○唐萱草○紫蘭○  
 貝母○おだまき○金盞花○萬壽菊○虫とり撫子○春蘭○柳葉菊○貝細工○  
 天人菊○あざみ○花たばこ○秦吾○すゝき○はぎ○蘭草○かるかや○くす  
 ○金線草○鳥扇○狸々草○花菱草○火炭母草○河原撫子○泊芙蘭○白鬚草  
 ○弟切草○糸桔梗○虎杖○鷺草○雪割草○麥の穂○小杜若○黄金草○立葵  
 草○山吹草○唐松草○男耶花○梵天草○青柳草○大文字草○胡蝶花○剪秋  
 羅○牽牛花○夕顔○鼓子花○旋覆花○鐵線蓮○佛甲草○睡蓮○蓮○菱花○  
 山梗菜○水葵○布袋草○蓴菜○慈菇○海芋○萍蓬○猿猴草○澤瀉○鼠尾草  
 ○九輪草○玉蟬花○燕子花○溪蓀。

(西洋種)

子チャー○ペコニヤ○ゼラニウム○パンバズグラス○ペラゴニウム○マ  
 プリムラ、シネンシス○プリムラ、オブコニカ○カルセオラリヤ○バンジー○デ  
 ジー○アルメリヤ○バイオレット○ツリトマ○カーチーシヨン○フロツク  
 ス○シチラリヤ○ゲルベラ○アスター○アクロクリニウム○アゲラタム



○アンテイリナム ○ストツク ○クラークヤ ○コスミヂウム ○ゴデチャ ○ク  
 アモクリト ○サルビグロツシス ○サンビタリヤ ○ギフソフイラ ○シヤスタ  
 デジ ○シザンサス ○スキート、ウキリアム ○ストケシヤ ○セントウレヤ ○  
 スカビオサ ○スキート、ビー ○チキタリス ○デモホセカ ○ナスタチユーム ○  
 トレニヤ ○子メシヤ ○子モフイラー ○バーベナ ○プロツリヤ ○ボツビー ○  
 ホリホツク ○ミヨソチス ○ルトベキヤ ○ニヂラ ○ビレシラム ○ペントステ  
 モン ○バルーンバイン ○ダチュラ ○ルピナス ○スタチス ○ブラツキカム ○  
 ローダンテ ○サキシフラガー ○アドニス ○アグロステンマ ○アロンゾヤ ○  
 コスモス ○パロツリヤ ○カンバニユラ ○クラークヤ ○カウスリツブ ○ゲニ  
 スタ ○デルヒニユーム ○カンジタフト ○ミニオネツト ○ニコチアナ ○ガウ  
 ラ ○カランドリニヤ ○クレオメ ○ロスオルト ○リナリヤ ○コルリンシヤ ○  
 ビランジ ○ペトウニヤ ○マルマルモツト ○エスクロニユーム ○アカンツス  
 ○スキザンサス ○マローブ ○サボナリヤ ○キセラントマム ○

□ 洋種球根類 (塊根を含む)

サイクラメン ○ジユスネリヤ ○ゲスネリヤ ○アチメネス ○リ、ウム (百合) ○  
 リリー、オブゼバレー (君影草) ○ベコニヤ ○グロキシニヤ ○アマリリス ○パン  
 クラチユーム ○ジャコバンリリー ○クリナムアルバ ○スノードロツブ ○ダ  
 リヤ ○カンナ ○カラ ○ゼヒランチス ○チルザンサス ○グラジオルス ○チ  
 グリジャ ○チユベローズ ○ヒヤシンズ ○チユーリツブ ○ムスカリ ○ナーシ  
 ツサス (水仙) ○クロカス ○アネモネ ○バルボコデアム ○スバラクシース ○  
 イリス ○イキシヤ ○フリジャ ○アラムサンクタム ○レナンキユラス ○リコ  
 ジヤム ○ツリテレヤ ○チオノドキサ ○パビヤナ ○シラ、カンバニユラーダ ○  
 ハサフシロ ○カマシヤ ○ブロデヤ ○アリアム ○バスチキニヤ ○シラベルヴ  
 イヤナ ○モントブレチャ ○テデヤ ○トリテリヤ ○クリヌム ○ヘメロカリス  
 ○エリスロニユーム ○アカバンサス ○

□ 洋種蘭科類

エーリデス ○アンダレーカム ○ビフレナリヤ ○カトレヤ ○ブラサボラ ○カ  
 タセタム ○チシス ○セロジ子 ○コクリヲダ ○ブラシヤ ○バルボフイラム ○



パーリングトニヤ○カランゼー○シクノチス○シンビジユーム○シブリベ  
ヂユーム○デンドロビユーム○デンドロキラム○エビデンドラム○グラマ  
トフィラム○リカステア○マキシラリヤ○ミルトニヤ○ヲドントグロツサ  
ム○ランシデユーム○フアレノブシス○レナンセラ○サツコラビユーム○  
シヨンパーキヤ○ソフロニテス○ソブラリヤ○スバソグロテス○ツニヤ○  
パンダ。

□ 雑草類

櫻蓼○七夜草○鴨跖草○蓬○鳩麥○芹○薺菜(ペン)草○ちゝこぐさ○は  
ゝこ草○ほとけのざ(タビラコ)○蒲公英○おゝばこ○紫雲英○土筆○からす  
瓜○すゝめの瓜○石蒜○つるば(巻耳)○おきなぐさ○るりさう○うつばぐさ  
○じやのひげ○のげし○やくしさう○やぶくわんざう○ねぢばな○さはら  
ん○みぞそば○たにそば○いぬ蓼○まつばにんじん○つめぐさ○あきのき  
りんさう○おか虎の尾○なるこ百合○ともへさう○のあざみ○やぶ豆○う  
めばちさう○たむらさう○くるまはさう○ほたるかづら○ほたるぶくろ○

るりさう○しらいとさう○いはいてふ○ちやうじぐさ○みぶおゝばこ○う  
りかは○みづがしは○ひるむしろ○かはたで○みづ虎の尾○さゝなぎ○と  
ちかゝみ○狸豆○はま撫子○はまひるがほ○はまゑんどう○けかものはし  
○はまさじ○めひじは(すもうとりぐさ)○すゝめのてつぼう○ちかや○ゑの  
ころぐさ(狗尾草)○にはほこり○はますげ○かやつり草○すゝめのひゑ○さ  
んかくすげ○ゐぐさ○さんかくゐ○くさよし○のびゑ○すゝめのちやひき  
○なるこひゑ○からすむぎ○ちからしば○ねすみのを○ひでりこ○あせす  
げ○ほたるゐ○やりぐさ○ひめてんつき。

三、果實を賞するもの

□ 木性のもの

栗○櫻桃○青梅○猴棗○金柑○佛手柑○黄柑○柚子○檳榔○榴梿○木半夏  
○野生無花果○藪柑子○山楂子○枸杞○須具利○落霜紅○黄實千兩○赤實  
千兩○白實萬兩○赤實萬兩○百兩金○石榴○南天燭○菘葵炎○槲寄生○齊  
墩樹○梔子○虎刺○南五味子○木瓜○にはうるし○アカシヤ○桃葉珊瑚○



藤 ○野薔薇。

□草性のもの

萬年青 ○春蘭 ○冬さんご ○姫葛 ○酸漿 ○通草 ○郁子 ○錦荔枝 ○薏苡 ○觀賞  
南瓜 ○蕃椒 ○蕃茄 ○南瓜 ○胡瓜 ○扁蒲 ○絲瓜 ○瓢箪 ○石刁柏 ○刀豆。

一四、材料の配合

盛花の材料として用ふる草木は其數甚だ多けれども其性狀に因つて同じ花にても美醜あり大小あり形狀も各々異なるものなれば自然使用し易きものと然らざるものとなり之等材料の配合は最も注意すべき事柄であつて始めて盛花を習得するものは何人も此の點を至難とするのである。  
蓋し材料の配合は盛花の生命であつて技術は少々拙にても配合のよき時は何となく引立つて見榮がよく之に反し如何に技術が巧妙でよく盛られてあつても材料の配合の悪き時は其盛花は只恰好よく美しく盛られたばかりで根本は死んで居るものと謂はねばならぬ。

其の配合に就ては挿入法の處にても述べたる如く主として出所と色彩の二つに注意して夫れに適合する様に組合すのである。

左に參考の爲め四季に別つて材料の配合の一例を表示せん然れども之れはたゞ其大體を示したもので種類の取り合せは出所及、色彩の配合上、此の例に準じて恰好なれども各地の氣候や其他の事情の爲め此の通りの配合が出来難い場合あり又各草木の數量は普通直徑一尺位の器を用ふるものとして計算せるものであつて勿論同じ一本の枝にても大小あり花や葉の出来工合や盛り方にもよつて實際に盛る場合には表示せる數量通りに盛る事は到底出来ない是非共通通りに盛れと云ふのではない各々材料に隨ひ夫々適宜に斟酌して盛らねばならぬ。

春の配合

主位	數量	副位	數量	客位	數量
虞美人草	五	ギフソフイラ	五	水仙	三
矢車菊	五	ギフソフイラ	五	天葵	三

材料の配合



材料の配合

薔<sup>ば</sup>百<sup>ひ</sup>虞<sup>ひ</sup>芍<sup>しやく</sup>桃<sup>とう</sup>ほ天<sup>てん</sup>ル辛<sup>しん</sup>胡<sup>こ</sup>玉<sup>ぎよ</sup>棗<sup>そう</sup>櫻<sup>おう</sup>洩<sup>せう</sup>

美<sup>み</sup>

ビ

竺<sup>ちく</sup>

蝶<sup>てつ</sup>蟬<sup>せみ</sup>棠<sup>たう</sup>

人<sup>にん</sup>

ナ

薇<sup>ゐ</sup>合<sup>あ</sup>草<sup>そう</sup>藥<sup>やく</sup>け葵<sup>あひま</sup>ス夷<sup>あ</sup>花<sup>はな</sup>花<sup>はな</sup>花<sup>はな</sup>疏<sup>そ</sup>

葉花 葉花

三 二 五 二 三 二 三 三 二 五 三 五 三 三 三 一

ア 珍<sup>ちん</sup>石<sup>せき</sup>グ ル 春<sup>しゅん</sup>ア 麻<sup>あ</sup>フ 虎<sup>こ</sup>マ お 牡<sup>ぼ</sup>洩<sup>せう</sup>  
ジ  
ア 珠<sup>しゆ</sup>才<sup>さい</sup>ラ ジ ビ ス 葉<sup>あ</sup>織<sup>お</sup>リ だ  
ン 珠<sup>しゆ</sup>才<sup>さい</sup>オ ナ バ ラ 毬<sup>たま</sup>毬<sup>たま</sup>ジ ツ ま  
タ ム 花<sup>はな</sup>柏<sup>はく</sup>ス ス 蘭<sup>らん</sup>ス ヤ 杖<sup>じやう</sup>ト き 丹<sup>たん</sup>疏<sup>そ</sup>

葉花 葉花 葉葉

五 三 三 七 五 五 九 三 三 三 七 三 三 五 五 二 二

天<sup>てん</sup>ゴ 百<sup>ひやく</sup>薔<sup>ば</sup>カ 石<sup>せき</sup>フ 天<sup>てん</sup>鐘<sup>かね</sup>雪<sup>せつ</sup>ア ヒ フ カ  
ン キ ユ ラ ス 薬<sup>やく</sup>ヤ 合<sup>あ</sup>薇<sup>ゐ</sup>ト 松<sup>しょう</sup>ヤ 葵<sup>あひま</sup>草<sup>そう</sup>た ネ ス ヤ ト

葉花 葉花 葉花

三 五 三 三 三 七 五 三 三 三 七 五 三 七 五 三

八七

ル 連<sup>れん</sup>薔<sup>ば</sup>ス ア 牡<sup>ぼ</sup>カ 海<sup>かい</sup>イ 虎<sup>こ</sup>水<sup>すい</sup>イ 牡<sup>ぼ</sup>紫<sup>し</sup>

ビ

ト

ス

リ

の

シ

キ

木<sup>き</sup>

盛<sup>せい</sup>

花<sup>はな</sup>

と

水<sup>すい</sup>

揚<sup>やう</sup>

ナ

ツ

ユ

ム

丹<sup>たん</sup>

ト

芋<sup>いも</sup>

ス

尾<sup>び</sup>

仙<sup>せん</sup>

ヤ

丹<sup>たん</sup>

蘭<sup>らん</sup>

ス 翹<sup>せう</sup>薇<sup>ゐ</sup>ク ム 丹<sup>たん</sup>ト 芋<sup>いも</sup>ス 尾<sup>び</sup>仙<sup>せん</sup>ヤ 丹<sup>たん</sup>蘭<sup>らん</sup>

葉花 葉花 葉花 葉花 半蕾 開

三 一 三 三 三 二 二 二 一 五 三 三 七 五 十 五 一 一

瑞<sup>ずい</sup>連<sup>れん</sup>ア 金<sup>きん</sup>ネ 虎<sup>こ</sup>花<sup>はな</sup>海<sup>かい</sup>ス ア お ル ル ギ  
ン ス バ 雀<sup>せき</sup>の 菱<sup>りやう</sup>キ ス だ ビ ビ フ  
チ ャ ラ ガ ス 花<sup>はな</sup>尾<sup>び</sup>草<sup>そう</sup>芋<sup>いも</sup>ト ビ タ ま ナ ナ フ  
ウ 香<sup>かう</sup>翹<sup>せう</sup>ス 花<sup>はな</sup>尾<sup>び</sup>草<sup>そう</sup>芋<sup>いも</sup>ト ビ タ ま ナ ナ イ  
ラ

葉花

二 二 三 五 五 三 三 五 二 二 五 三 三 三 五

レ ナン キ ユ ラ ス 芍<sup>しやく</sup>シ バ 天<sup>てん</sup>マ 芍<sup>しやく</sup>燕<sup>えん</sup>シ ヒ チ 薔<sup>ば</sup>荷<sup>か</sup>お  
ン キ ユ ラ ス 薬<sup>やく</sup>ヤ 合<sup>あ</sup>薇<sup>ゐ</sup>ト 松<sup>しょう</sup>ヤ 葵<sup>あひま</sup>草<sup>そう</sup>た ネ ス ヤ ト

葉花 葉花 葉花

七 五 二 二 七 五 三 五 二 五 二 二 三 三 三 三 三

八六















材料の配合

雁	夏	山	南	南	ラ	は	ハ	ヒ	ア	メ	蓄	天	楓
来			天	天	ン	ま	ブ	ッ	カ	ラ		竺	
紅	檀	菊	燭	燭	シ	ま	ロ	ス	リ	ス	薇	葵	
					デ	ぎ	サ	カ	フ	ト	薇	(白)	
					ユ	く	ム	ス	ア	マ	薇		
					ーム	(吹上)	ナス	カ	ー				

一	二	五	二	二	二	五	三	三	三	三	三	三	五
紫	春	さ	管	野	レ	裡	ア	ク	玉	ス	シ	マ	
		ム	咲	の	ッ	ア	カ	ロ	羊	ミ	ベ	ラ	
		りん	嫁		ク	リ	リ	ト	歯	ラ	ラ	ン	
		ど	う	菊	ス	カ	カ	ン	ス	ツ	ク	ス	タ
苑	蘭	う	菜	菊	ヤ	柳	カ	ン	ス	ク	ス	タ	

葉實

二	九	三	五	五	五	三	三	三	五	五	五	五	
ト	深	石	金	水	蓄	天	蓄	シ	ダ	天	ベ	ヒ	さ
	山	の	盞			竺		ヤ	リ	竺	コ	ス	ム
	羊					葵		ス	デ	葵	ニ	カ	りん
	齒	松	花	仙	薇	葵	薇	タ	シ	(白)	ヤ	ス	どう

葉花

五	七	七	五	七	五	三	三	三	五	三	三	三	五	三
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

九五

蓄	コ	芙	コ	ア	コ	蓄	メ	ラ	ダ	ガ	か	わ	秋	蓄
ス		リ	ウ	グ	ス	ス	ラ	ス	リ	リ	る	れ	海	
ス	モ	ウ	ス	ラ	モ	ス	ス	ト	マ	ヤ	か	も	棠	薇
薇	ス	蓉	ス	タ	ス	薇	マ				や	こ	棠	薇
				ム	ス						や	う		

盛花と水揚

三	三	二	三	三	三	三	三	二	三	三	三	三	三	三
カ	金	珍	サ	天	ア	ラ	玉	ア	ア	白	龍	菊	ア	
ー	線	珠	ル	人	ゲ	ン	羊	ス	ス	白	龍	菊	ア	
ネ	線	花	ビ	人	ラ	タ	羊	ス	ス	白	龍	菊	ア	
ー	草	(紅葉)	ヤ	菊	タ	ナ	歯	ス	ス	秋	膽	タ	ム	
シ				菊	ム									
ヨ				菊	ム									
ン				菊	ム									

五	五	三	三	五	五	三	五	五	五	三	五	五	五	五
天	黄	は	シ	ト	ダ	ベ	天	ヒ	は	女	山	野	天	
		ま	ヤ	レ	リ	コ	竺	ス	ま	耶			竺	
		ぎ	ス	ニ	ヤ	ニ	ス	カ	菊	花	菊	菊	葵	
		く	タ	シ	ヤ	ヤ	葵	ス	(吹上)	花	菊	菊	葵	

九四

三	三	五	五	七	三	三	三	三	五	五	五	五	三	
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--







○ 躑躅	○ 梅 (古木)	○ 白梅	○ ポインセチヤ	○ フリヤ	○ 寒牡丹	○ 梅 (古木)	○ シネラヤ	○ 天竺葵	○ シネラヤ	○ 蕨柑子 (實付)	○ 木蘭	○ 梅 (古木)	○ 枇杷
------	----------	------	----------	-------	-------	----------	--------	-------	--------	------------	------	----------	------

葉花

三〇	二	二	三	七	五	二	一	二	三	二	二	二	二
珍	萬	臘	ア	ア	ア	白	ネ	マ	ア	水	ア	羽	珍
珠	年	青	ス	ジ	ス	バ	フ	ラ	ジ	ス	ス	衣	珠
花	梅	梅	ガ	タ	ガ	椿	ヒ	ン	ン	タ	タ	藍	花

葉花

三〇	二	五	五	五	五	三	五	三	五	七	五	五	一	五
ベ	福	桃	薔	ヒ	チ	寒	カ	フ	マ	深	金	水	寒	寒
コ	壽	葉	ヤ	ユ	リ	セ	ル	ガ	レ	山	羊	羊	羊	羊
ニ	草	珊瑚	シ	ン	ツ	オ	ラ	リ	ヤ	花	花	仙	菊	菊

葉花

葉花

三 五 三 三 三 三 五 三 七 五 五 五 五 七 五 五

○ 天竺葵 (白)	○ 寒桜	○ ポインセチヤ	○ 落霜	○ 梅 (古木)	○ 冬至	○ ポインセチヤ	○ 枇杷	○ 鐵砲	○ 春蘭	○ 松	○ カト	○ 春蘭	○ 萩
-----------	------	----------	------	----------	------	----------	------	------	------	-----	------	------	-----

葉花

葉花

三〇	三	三	二	二	二	三	二	三	七	二	一	二	七	三
ブ	マ	ガ	落	深	椿	珍	ア	ア	寒	ア	ア	玄	寒	寒
ー	レ	山	霜	山	珠	珠	ス	ス	ス	ス	ス	鐵	鐵	鐵
ゲ	ツ	羊	紅	羊	花	花	バ	バ	バ	バ	バ	羊	羊	羊

三〇	五	三	五	二	五	五	七	五	五	七	五	ト	五	五
ア	寒	薔	寒	福	水	天	寒	プ	深	寒	マ	石	石	石
ネ				壽	羊	竺	竺	リ	山	羊	ガ	レ	レ	レ
モ								ム	羊	羊	ツ	ツ	ツ	ツ

葉花

葉花

七 三 五 三 五 五 七 五 三 五 三 五 七 五



ア	ス	バラ	ガス	海	花	五	〇	杜	五	〇	フ	リ	シ	ク	ラ	メ	ン	ヤ
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
杉	木	金	佛	冬	山	南	薔	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花	花
子	瓜	梅	手	至	子	五	柑	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
(古木)																		
二	三	三	一	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
藪	深	水	佛	春	子	春	水	子	春	水	子	春	水	子	春	水	子	春
柑	山	羊	手															
子	齒	仙	柑	蘭	齒	蘭	仙	齒	蘭	仙	齒	蘭	仙	齒	蘭	仙	齒	蘭
五	七	七	二	九	五	九	二	七	五	五	〇	シ	ク	ラ	メ	ン	ヤ	
石	寒	天	寒	寒	寒	石	深	寒	山	羊								
松	菊	葵	菊	菊	菊	松	齒	菊	松	齒	菊	松	齒	菊	松	齒	菊	松
五	三	五	五	五	五	五	五	五	五	五	七	三	五	三	五	三	五	三

一五、水揚法

後庭に咲き競ふ美しく草花や山野を逍遙して手折り來れる可憐な千草を瓶に

挿すに其もの性質に因つて間もなく萎凋し去るものと、よく水分を吸上げて長く生氣を保つものがある、このすぐ萎れるものも適當な水揚法を施す事によつて切口の吸収作用と葉の發散作用を旺盛ならしめて或程度まで花の生命を長からしむることが出来る。

折角立派に盛り上げた花がまもなく萎れて形がくづれる様では不體裁至極である、斯かる事は往々夏の盛花にあるのであつて之は水揚と云ふ手数を省くからである如何に夏の花でも水揚法を行へば容易に萎凋するものではない。水揚に就ては古來より頗る研究せられたもので流儀花では難かしい秘傳秘事とせられて竹の水揚などは奥許物として猥りに教へられなかつたのである、故に一般に水揚のよきものを選んで水揚の悪いものはあまり用ひられなかつたが近時は非常に進歩して化學的藥品を使用して容易く行はれる様になつたのである、辱知、小林鷺洲氏は曾て其豊富なる造詣を以て「插花水揚法」を著して曰く、水揚法は古來より一種の秘傳秘事とせられて容易に人に授けず、又之を知らしめざるを常とす、當今文明の世に何を苦しんでかゝる陋習を固守するか宜しく



其關門を破壊して之を世に公にせん、と。

是れ狭量無智な輩を痛罵して餘蘊なし、斯道に志すものは須らく、此の關門を徹去して區々たる陋習を捨て秘密は一切開放して文明的に研究し、以て斯道の發達を圖らん事を切望するのである。

盛花には挿花ほどに水揚の必要がない挿花流儀花では形を整ふる爲め草木を長時間水より離して置く故普通にてよく水を揚ぐるものにも自然困難となれども盛花は比較的早く盛り上げる事が出来る故後庭などで剪つて来たものなれば水揚を施さなくとも大抵はよく水を揚ぐるものであるが花戸で求めた場合や他から草花を貰つた時には剪つてから割合に長き時間経て居るものなれば水揚の困難なる草木には是非共夫れに相應する水揚法を施さねばならぬ故に一通り水揚法を習得することは必要である。

### 一六、水揚の仕方

水揚の方法には種々あれども之を大別する時は物理的方法と化學的方法との

二つに分つことが出来る以前には主として物理的方法であつたが近來は化學的の方面より研究せられて種々の藥品を使用する様になり、共に其方法手段は非常に多く微細に亘れば枚舉に遑ない程であるが通例行ふ方法としては。

- 一、莖及枝の切口を打ち砕くこと。
  - 二、小刀又は鋏にて莖及枝の末端を四つ割にすること。
  - 三、小刀にて莖及枝の皮を縦に切痕を入れること。
  - 四、切花を把束して根元に重しを附し水中に沈め置くこと。
  - 五、切花を水に挿し一夜露にあてること。
  - 六、莖及枝の末端を一寸許り焼くこと。
  - 七、莖及枝の末端を湯中にて煮沸すること。
  - 八、莖及枝を倒さにして切口より微温湯にて逆湯をなし冷水へ挿入すること。
  - 九、水鐵砲にて莖中へ水を注射すること。
  - 一〇、化學的藥品によること。
- 等にして其他砂糖水を葉面に吹きかけて葉に濕ひを保たしめ萎凋を防止する



こと等あれど、この方法は根本的でなく姑息な手段である。

一般に水揚は四季を通じて夏の花は最も困難であつて一日中にては口中は最も悪しき故に早朝か夕方日の光の當らぬ時、若くは雨天の際に剪るべきである、又同一の花にても日蔭に生せるものは日當りよき場所のものに比し水揚悪しく新枝のものは老枝に比し水揚困難なり。

(一)の方法即ち莖の切口を打碎いて挿す時は莖の切口と水の接觸する面積が多くなりたる譯なれば随つて水を吸収すべき面積が廣い理である故に水揚のよきものにてはすべて盛る際には此の方法を施す必要がある。

(二)の方法も前法と同様な理であつて主として木性の堅い枝に應用せらる。

(三)の方法は主に莖の硬いものに用ひられ二の方法と併せて行つた方が効力がある。即ち小刀を以て莖に三、四條の縦痕を入れて毛細管引力に因つて水分を吸上げるのである。

(四)は水圧法とも云つて瓶又は桶に一杯に水を張つて切花を適宜に把束して根元に重しを附けて莖の立つて居る儘に水中に沈めて置くので之は少なくと

も十二時間位放置せねば効力がないので長時間を要するの嫌がある。

(五)の方法は繻等の器へ切花の切口を浸して夜露のよくなる處へ一夜放置するのであつて、斯くする時は全く萎れたるものにてはよく水を揚ぐるものである又既に盛花として盛り上げたものが萎れた場合には其器の儘夜露に當てる時は翌朝に至つて立派に復活させることが出来る。

(六)此の方法は古くより行はれて居つたもので比較的硬い莖のものに適當で普通は炭火を以て焼くのであるが炭火は火力弱きにかゝらず火熱が廣く莖葉に及ぼすを以て花や葉を害せぬ様に焼く部分を除いて他は濡布の様なものに掩はねばならぬ、酒精洋燈は火力が強く加之熱を他に及ぼさず局處を急に焼く事が出来て前者の虞れを防ぎ且、取扱が非常に便利である。又此の方法か次の七の方法を施した後で薬品の液に浸す場合もある。

(七)此の熱湯法も古くより知られて居つたもので切花の切口を莖の軟弱なもの二、三秒間、木質の硬きものは二、三分間熱湯中にて煮沸し熱の未だ冷めざる間に於て冷水に投するのである。



(八) 此の方法は一又は二の方法と併用せらるゝもので即ち切花の切口を碎くか又は四つ割として倒さにし微温湯を以て三、四回急に逆湯をなし熱の冷めざる間に可成深く冷水中に挿入するのであつて雁来紅等に應用すれば好結果を得る事が出来る。

(九) 之れは通例蓮や萍蓬等の如き莖に穴のあるものに應用せらるゝ方法であつて、水揚ポンプを以て水を注入し然る後水中へ挿入するのである、又此の場合に水以外に温湯や調合せる薬品を注入する事も有る。

(一〇) 薬品に依る場合に通例用ひらるゝものは。

酒精、清酒、焼酎、エーテル、鹽酸、石炭酸、食鹽、硫黄、薄荷油、テレピン油、樟腦油、生姜液、蕃椒、山椒、胡椒、川芎、艾、等であつて就中鹽酸は廣く使用せらる。

薬品を使用するに當つて注意すべきは、銅器を用ふる際には腐蝕の虞あるを以て酸類を用ひざる様にし、又香氣を有する植物、例へば薔薇、牡丹、蓮、へツオトロッパ、君影草等に油類や臭氣ある薬品を用ふる時はその臭氣の爲め花

自然の香氣を滅殺するものである故 油類を用ひし場合には水面に浮ぶ油球を紙片にて吸ひ取らねばならぬ。

(酒精、清酒、焼酎) 以前には酒精が無かつた爲め酒や焼酎を用ひ、古くから知られて居つた方法であつて藤や萩等には最も効力がある。即ち切口を酒精なり焼酎なりに暫時浸して引上げ夫を直に清水に投じ然る後適宜の長さに切つて盛るのである。

酒精及焼酎に浸積する時間は植物の種類や液の濃度によつて各々異にせねばならぬが通例ダリヤの如き質の軟弱なものは二秒時位、萩の如きものは七、八秒間、藤の如き硬き木質のものは二、三分間位が適當である。

(エーテル、鹽酸、石炭酸) は總て酒精を用ふる場合と同様に行へばよいのである。但し鹽酸は劇薬なれば工業用のものを用ふべし。

(食鹽) は古くより水揚に用ひられたものであつて禾本科の植物等は食鹽水中に挿入すればよく水を揚ぐるものである、又、ダリヤやポリゴナム(花たて)等の如き軟かき莖のものは切口を碎いて食鹽を擦入し清水に投ずれば有効である。



(硫黄) も食鹽と同様で切口を碎いて硫黄抹を充分に擦込んで清水中へ挿入するのであつて牽牛花や蔦蘿草の如き旋花科の植物に行ふて効がある。

(薄荷油、テレピン油、樟腦油、生姜液) は切花の切口のみを此等液中へ暫時浸すのであつて軟弱な草性のものは二三秒間、木性の硬きものにて五六秒位である。

(蕃椒、山椒、胡椒、川芎、艾) 等は古くより用ひられたものであつて水一升へ艾一つかみと山椒又は蕃椒、胡椒等を約一勺位を加へたるものを八合位に煮つめたる液中へ切口を浸すか若くは此の液中にて切口のみを暫時煮沸するのである。

### 一七、切花の水揚

左に普通水揚の困難なるもの數十種を選んで四季に分ち各季節の草木に就て水揚の方法を述べんとす。之等は總て著者の實驗を経たものであるが此の中には既に斯界の人に因つて發表せられて居るものも少なくない、又各自の實驗の

結果之等の方法より、より以上簡便で有効な方法を發見されて居るかも知れないが、先づ以下記載の方法を施せば萎凋せるものも復活してよく水を揚げる事は請合である。

### 一、春の草木

#### □ 牡丹

切口を一寸許り炭火、又はアルコールランプにて莖の火になるまで焼き打碎いてすぐ冷水へ投じ活くる際に適當の長さに切りて用ふ。

#### □ 芍薬

牡丹と同じ方法を行ふか、又は切口を焼きたる後鹽酸に四、五秒間浸し冷水へ投ずべし、斯くする時はより以上の効果を待。

#### □ 藤

莖の切口を四つ割にして酒精か焼酎へ二三分間浸し後冷水へ挿入す又は清酒にて五分間位煮沸しても可なり。



□木蘭、辛夷

莖の切口を一寸許り打碎いて、鹽酸に五、六秒間浸し水中へ投入す、又切口を焼いても可し。

□石楠花

莖の切口を打碎いて、鹽酸又は薄荷油へ七、八秒間浸し水中へ投入す。

□金雀花

切口を打碎いて、鹽酸へ三、四秒間浸し水中へ投入すべし。

□椋棠花

切口を打碎き、鹽酸又は薄荷油へ三、四秒間浸す。

□麻葉繡毯(すいかけ)

切口を打碎いて、エーテルに二、三秒間浸す。

□珍珠花

切口を碎いて、鹽酸に三、四秒間浸すか、又は十倍位の石炭酸水中へ四、五秒間浸すべし。

□薔薇

切口を碎き、テレピン油又は鹽酸へ四、五秒間浸す。

□楓

莖の切口をよく打碎いて、稀鹽酸に五、六秒、又は生姜液に一、二分間浸すべし。極く早朝に剪れば水揚を行はずとも可なり。

□連翹

切口を打碎いて、鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□アブチロン(うきつり木)

切口を打碎いて、アルコールに二、三秒、又はテレピン油へ三、四秒間浸し、後清水へ投入すべし。

□アカパンサス

莖の切口を碎いて、薄荷油へ一、二秒、又はアルコールへ二、三秒間浸すべし。

□ナスタチウム(金蓮花、のうせんはれん)

切口を碎いて、アルコールへ二、三秒間浸すべし。



□ カンヂタフト (まがりばな)

切口を打碎いて、鹽酸へ二、三秒間浸し、後取り出し冷水へ挿入すべし。

□ ストツク (紫羅欄花)

切口を打碎いて、鹽酸又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ カルセオラリヤ (きんちやく草)

切口を碎いて、アルコール又はエーテルへ二、三秒間浸し冷水へ挿入すべし。

□ シネラリヤ (きくぶき)

切口を碎いて、アルコールか、テレピン油へ三、四秒間浸す。

□ 荷苞牡丹

切口を碎いて、エーテルへ三、四秒間浸すか胡椒にて煮沸すべし。

□ アクイリギヤ (おだまさ)

切口を碎き、エーテルへ二、三秒間浸す。

□ 菜の花 (あぶらな)

切口を碎いて、鹽酸に一、二秒間浸すか、又は逆湯を爲すべし。

□ 薊

切口を碎き、アルコールに二、三秒間又は生姜液に四、五秒間浸すべし。

□ 薔薇、虞美人草

切口を碎き、鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□ ペチユニヤ (つくばね朝顔)

切口を碎いて、鹽酸に二、三秒間浸す。

□ ルピヌス (昇り藤、はうちちまめ)

切口を打碎きアルコールへ三、四秒間浸すか、又は逆湯を爲すべし。

□ ギフソフヒラ (糸撫子)

切口を打碎き鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□ エシヨルヂヤ (花菱草)

切口を碎いて、薄荷油に三、四秒間浸す。

□ アンテイリナム (金魚草)

切口を碎きアルコール、又はエーテルに三、四秒間浸すべし。



虎の尾

切口を打碎き鹽酸又は薄荷油に三、四秒間浸すべし、又切口を焼くのみにて可なり。

ア子モ子

切口を碎いて、鹽酸に二、三秒間浸す。

レナンキユラス

(うまのあしがた) 切口を碎いて、鹽酸に二、三秒間浸すか又はアルコールに三、四秒間浸すべし。

フリージャ

(あさぎすむせん) 切口を打碎いて、鹽酸又はアルコールへ二、三秒間浸すべし。

シクラメン

(ぶたのまんじう) 切口を碎いて薄荷油へ一、二秒間又はアルコールへ二、三秒間浸し冷水へ投ず。

ス井トピー

(麝香連理草、花豌豆) 切口を碎いて、アルコールへ一、二秒間又はテレピン油へ二三秒間浸すべし。

二、夏の草木

紫陽花

切口を一寸許り打碎いて莖の皮に小刀にて縦に四條の切痕を入れ逆湯を行ひて花頸まで没する様に冷水中に投ず、又は切口を四つ割にして炭火か、酒精洋燈にて焼き鹽酸に四、五秒間浸し冷水に挿入すべし。

百日紅

(さるすべり) 切口を打碎いて、鹽酸又は薄荷油に三、四秒間浸すべし。

木槿

切口を打碎いて、薄荷油又はテレピン油に三、四秒浸し水中へ挿入すべし。

夏麝

切口を碎いて、酒精又は焼酎へ二、三分間浸す。

竹

早朝に剪り來り少量の水に蕃椒、山椒、艾の三品を等分に混じたるものにて一



時間許り煮沸するか又は水揚ポンプにて稀鹽酸を莖中へ注入すべし。

□ 粟 (俗に、あふむ、と云ふ)

切口を打碎き薄荷油に二、三秒間浸す、

□ フクシヤ (つりうき草)

切口を打碎いて、テレピン油に三、四秒間浸す。

□ はまぎく (吹上ぎく)

切口を碎いて、炭火か、アルコールランプにて焼くか又はエーテルに二、三秒間浸すべし。

□ 桔 梗

切口を七、八秒間煮沸するか、又は鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ カンナ (美人蕉)

莖を碎いて、一分間許り煮沸してすぐに冷水へ投ず、又はアルコール中へ三、四秒間浸すべし。

□ ダリヤ (天竺牡丹)

切口を打碎いて、五、六秒間煮沸し其部分へ鹽を塗りつけるか、又はアルコール中へ三、四秒間浸すべし。

□ ぎぼうし

切口を碎いて、薄荷油又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ ベコニヤ

切口を五、六秒間煮沸するか、又は薄荷油へ二、三秒間浸すべし。

□ はなたで

切口を碎いて、逆湯をなし水中へ深く挿入するか、又は切口を煮沸すべし。

□ フロツクス (夾竹草)

切口を碎いて、鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ サルピヤ

切口を煮沸するか、又は鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□ デルヒニウム (飛燕草、千鳥草)

切口を碎いて、アルコール又はエーテルに二、三秒間浸すべし。



黄蜀葵、紅蜀葵、蕃椒、山椒、艾を混せる液中にて七、八秒間煮沸するか又は切口を焼きて鹽酸に四、五秒間浸すべし。

□ 縷紅草

切口を碎いて、薄荷油に二、三秒間浸す、又は硫黄粉を切口へ擦込むべし。

□ 龜牛花、鼓子花

切口を碎いて、アルコール又はエーテルへ三、四秒間浸すべし。

□ 狸草

切口を七、八秒間煮沸するか、又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ アジアンタム

鹽酸に三、四秒間浸し冷水へ投すべし。

□ グラジオルス (唐菖蒲)

切口を碎いて、薄荷油又は生姜液に四、五秒間浸すべし、又は切口を煮沸しても可なり。

□ モントブレチヤ (俗に、あぢやら、と云ふ)

切口を碎いて、アルコール又はエーテルへ二、三秒間浸すべし。

□ イリス

切口を碎いて、テレピン油又は薄荷油へ一、二秒間浸すべし。

□ イキシヤ

切口を打碎いて、鹽酸又はアルコールへ二、三秒間浸すべし。

□ アマリ、ス

莖の切口を碎いて、薄荷油へ二、三秒間浸すべし。

□ カラジウム

切口を碎いて、五、六秒間煮沸し、すぐに冷水へ挿入すべし。

□ ゲロキシニヤ

切口を打碎いて、アルコール又はエーテルへ二、三秒間浸すべし。

□ クレドンドロン (源平木)

莖の切口を打碎いて、鹽酸に三、四秒間又は薄荷油へ二、三秒間浸すべし。



□ コレオプシス (はるしやぎく)

切口を砕いて、テレピン油又は樟腦油へ二、三秒間浸すべし。

□ シレネ (虫とり撫子)

切口を打砕いて、鹽酸に一、二秒間浸すべし。

□ シヤスタデジ

切口を砕いて、鹽酸に三四秒間浸すべし。

□ ヘリアントース (向日葵)

切口を打砕いて、薄荷油に二、三秒間浸すべし。

□ チキタリス

切口を打砕いて、薄荷油に二、三秒間又はアルコールへ三、四秒間浸すべし。

□ カレパニユラ (つりがね草)

切口を砕いて、鹽酸に二、三秒間又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ ゴテチャ (けまつよいぐさ)

切口を砕いて、生姜液に四、五秒間又は鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ パーベナ (美女櫻)

切口を砕いて、アルコールに三、四秒間、又は鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ 芦

切口を砕いて、鹽酸に三、四秒間浸すか、又は蕃椒、山椒、艾を混ぜる液にて煮沸すべし。

□ 蘭

切口を砕いて、鹽酸に五、六秒間浸すべし。

□ 猿猴草

切口を砕いて、五、六秒間煮沸するか、又は鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□ 蓮

切口を五分間許り煮沸してすぐに冷水へ挿入するか、水揚ポンプにて水を注入すべし。又は池に生せる儘根元より酒精洋燈等にて焼き取りて冷水中へ投ず、其他切口へびんつけを詰める方法などあれど、あまり良法にはあらず。

□ 萍蓬



水揚ポンプにて水を注入するか、山椒、蕃椒、艾を混ぜる液にて一、二分間煮沸して、すぐに冷水へ投すべし、又此の液をポンプにて注入しても可なり。

□澤瀉

切口を砕いて、七、八秒間煮沸すべし。

□海辛

水揚ポンプにて水を注入するか、七、八秒間煮沸すべし。

### 三、秋の草木

□芙蓉

莖の切口を一寸許り火になるまで焼き、打ち砕いて水中へ投するか、又は切口を砕いて鹽酸か薄荷油に七、八秒間浸すべし。

□萩

切口を砕き、煮沸して冷水へ挿入するか、又はアルコールへ四、五秒間浸すべし。

□秋菊

切口を一寸許り焼き冷水へ投すべし。

□ブーゲンベリヤ

切口を砕いて、鹽酸に、三四秒間、又は樟腦油へ二、三秒間浸すべし。

□冬さんご

切口を打砕いて鹽酸に、四五秒浸すか、又は生姜液にて、三四秒間煮沸すべし。

□ヘリオトロップ(香水木)

切口を打砕いて、薄荷油に、一二秒浸すか、又はアルコールへ、二三秒間浸すべし。

□イレシネ

切口を打砕いて、アルコール、又はエーテルに二、三秒間浸し冷水へ投すべし。

□アゲラタム(霍香薷)

切口を砕いて、テレピン油へ一、二秒間又はアルコールへ二、三秒間浸すべし。

□すき

切花の水揚



切口を碎いて稀鹽酸に七八秒間浸すべし。

□ 蘭草

切口を煮沸するか、又はテレピン油に三、四秒間浸すべし。

□ かるかや

切口を碎いて、アルコール又は鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□ 紫苑

切口を碎いて、薄荷油又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ われもこう

切口を煮沸するか、又はアルコールか、エーテルへ三、四秒間浸し冷水へ投ず。

□ 雁來紅

切口を碎いて、逆湯をなし可成深く冷水へ挿入す。又は鹽酸に三、四秒間浸す

か、切口へ食鹽を擦込みても可なり。

□ 秋海棠

切口を煮沸するか、又は切口を打碎いて、アルコールか鹽酸に三、四秒間浸す

べし。

□ 秋明菊 (草牡丹)

切口を碎いて、鹽酸かアルコール又は薄荷油へ四、五秒間浸し冷水へ投ずべし。

□ ガイラルデヤ (天人菊)

切口を碎いて、鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ トレニヤ (夏すみれ)

切口を碎いて、アルコール又はエーテルへ三、四秒間浸すべし。

□ コリウス

切口を煮沸するか、又はアルコールへ二、三秒間浸すべし。

□ コスモス (秋ざくら)

切口を碎いて、鹽酸又はテレピン油へ三、四秒間浸すべし。

□ ジンニヤ (百日草)

切口を碎いて、鹽酸へ二、三秒間浸す。

□ ビンカ (日々草)



切口を碎いて、薄荷油カレピン油へ三、四秒間浸す。

□アスター(翠菊)

切口を煮沸するか、薄荷油へ三、四秒間浸す。

□シペルス

切口を碎いて、鹽酸へ三、四秒間、又は生姜液へ六、七秒間浸すべし。

□薔

切口を煮沸するか、アルコールへ四、五秒間浸すべし。

#### 四、冬の草木

□櫛

莖の切口を四つ割りにして鹽酸に七、八秒間浸す。又花は落ち易き故花の中へ少量の食鹽を注入すべし。

□山菜

莖の切口を四つ割りにして鹽酸に五、六秒間浸す。

□臘梅

切口を碎き、鹽酸又は薄荷油に四、五秒間浸し冷水へ投すべし。

□瑞香

切口を碎いて、薄荷油カレピン油へ四、五秒間浸す。

□落霜紅

切口を碎いて、一分間許り煮沸するか、アルコールへ四、五秒間浸すべし。

□桃葉珊瑚

切口を碎いて、生姜液へ七、八秒間浸す。

□ボンセチャ(猩猩木)

切口を碎いて、一分間位煮沸するか鹽酸に三、四秒間浸す。

□寒菊

切口を焼くか、鹽酸に三、四秒間浸すべし。

□甘藍

切口を四つ割りにして煮沸するか、鹽酸又はアルコールへ三、四秒間浸す、逆



湯を行ふも可なり。

□ 萬年青

切口を鹽酸に二、三秒間浸すべし。

□ はらん

切口を砕いて、煮沸するか、アルコール又は薄荷油へ三、四秒間浸すべし。

□ 薑

切口を砕いて、煮沸するか、鹽酸に四、五秒間浸すべし。又水揚ポンプを用ふるも可なり。

□ 欵冬

切口を砕いて、アルコールかエーテルへ三、四秒間浸すべし。

□ 水仙

切口を充分に砕いて、アルコールへ五、六秒間浸し水中へ投すべし。

□ 金盞花

切口を砕いて、薄荷油又は鹽酸へ三、四秒間浸すべし。

備考

山本農學士と著者の共著になる『花壇と花卉』は上、下巻を通じて後庭を利用したる花壇の作り方や、盛花に適する花卉の栽培法や、西洋草花の名稱を、詳述しあるを以て、同好の士の御一讀を希望す。

圖解 盛花と水揚 (終)



大正六年九月廿四日印刷  
大正六年九月廿六日發行

圖解盛花と水揚

正價壹圓

不許複製



著者 橋本墨花

發行者 前田梅吉

印刷者 堀越幸

大正市東區南渡邊町八番地  
大正市東區阿保庄二番町一番地

(本館堂造日)

發行所

大正市東區南渡邊町八番地  
電話東四九九八  
振替大阪二二四七三

東部發賣元

東京市神田區表神保町

前田文進堂  
修文館書店



小林鷺洲著

■菊版和装寫真版並に木版四十餘種挿入■

# 投入盛花草木の出生

正價金壹圓  
送料八錢

草木四百廿八

種類の出生を

究め生花の自

然容姿を圖説

し秘法公開の

良師友書出づ

本書は投入盛花は勿論總て花の生き方の根本となる出生を全くの初心者にもわかる様に丁寧な解説したもので草木の種類は四百廿八種の多きに上り必要なるものには精巧なる寫真版や木版で説明が補つてある本書を座右に備へて置けば著者に手を執て教へらるゝと同一で一讀直ちに生花の根本理由に悟入し得るで有らう草木の出生を知らずして花を生けるは羅針盤なくして航海すると同じく無謀の極である苟も花道に志す者は本書に就て悟る所あれ

本對世評一書るに一般

(大阪毎日新聞) 本書は古來より花道において最も重要視され居る出生即ち草木自然の容姿に就き之を形態、光輝、風情の三種に分ちて四百廿八種の植物の出生を懇切に説明し、猶其説明の足らざる所は精巧なる寫真版並に木版四十餘を以て補足し投入盛花等九學が人々の良師たらん事を期せる物にて斯道に嗜む者一冊を具ふるも致て無用にはあらずし投入盛花の秘法を極めてゐる(八月廿一日)  
(山陽新聞) 花道は現今最も隆盛を極めてゐる(八月廿一日) 投入盛花において殊に然りである、が其枝葉の技巧のみ走つて根本の自然を無視してはゐないか、一般の人に對し本書が「出生」即ち「自然」を説いたのは最も機宜に適したことであり、花道の人に此書を奨める(八月廿五日)

大德寺管長見性宗般禪師  
南禪寺前管長豐田毒湛禪師  
玉置一成居士著  
題字

## 忽日再版 茶道要鑑

菊判日本紙和綴紙數三百五十頁  
口繪寫真版廿餘全三冊映入  
正價金貳圓 送料八錢

獨案内を以て茶の湯を修得せんとするは不可能なり然れば本書の如きは茶筌を  
持つすべを辨へた人なれば一足飛に宗匠となれるの良書なり、其内容は卷頭に  
於て現代的茶道を論じ進て正午、朝茶、夜話、曉、時間外、跡見、一客一主の  
點方及び懷石の順序より眞行草三式九段の膳部を記し八爐の如きは五十有餘の  
圖解を以て示し加ふるに廿六の参考茶室あり又茶庭露路に至ては最も深切に詳  
細を極め茶具使用と解釋などは從來師匠の教へざるものなれば茶人として心得  
置くの必要あり餘録としては茶室の飾附及び點方懷石等の作法より主客の應答  
振りを小説的に説明したる茶道の参考書なり



貝原益軒翁遺著  
下田歌子女士註解  
柴直太郎君主婦心得序文

第四版

女大學註解全

附 主婦の心得

菊判半形天金 美裝百三十頁餘  
定價卅五錢 送費四錢

本書は學徳高き益軒先生が世の婦人の爲に心血を注いで書かれたる女大學へ女子教育大家下田歌子女士が現代の婦人に適するやう校註を加へられ巻末には主婦大切の心得を載す今日婦人の是非一讀すべき良書です

内 容 縮 寫 (本 書 三 分 一)

女大學註解

貝原益軒遺著  
下田歌子校註  
金澤仁作編

第一條 (親の教)

夫女子は成長して他人の家へ行、舅姑に仕る物なれば男子よりも親の教ゆるかせにするべからず。  
女子といふものは成年に達しますと、必ず他家へ嫁に行つて一家の主婦とならねばならぬものであります。今日の様に女子教育が盛んに成つて参ります。

主婦の心得

一 樂齋元誠編

嫁せんとする女子に告ぐ

夫婦は一家の基礎にしてその鞏固なるは夫婦よく和合するにあり夫婦よく和合すれば一家の繁榮するや期すべきなり  
夫婦の和合は愛敬を旨とし夫唱婦隨の道により夫に對しては勿論その尊嚴を愛敬しその卑賤を侮辱し其語を動を慎み苟も人々の嫌惡を招かざる様心掛け和氣謙々のうちに樂しき家庭を形成するにあり



11  
290



終

